北海道





ほっかいどうの
防災教育 実践編

道民みんなで取り組む　災害に強い北海道













はじめに

～道民みんなで取り組む災害に強い北海道～

豊かな自然あふれる北海道。

私たち道民は、自然の恩恵と災害の二面性を理解し受け止めながら、この大地で暮らしています。いつでもどこでも直面する可能性がある、さまざまな災害に際して、「いのちを守りぬく人が育っていく」ためには子どもたちからお年寄りまで、あらゆる世代の道民による防災活動の輪が、日常の暮らしの中に広がっていくことが大切です。

防災教育は、難しいことばかりでも、堅苦しいことばかりでも、限られた人のためのものでもありません。災害に正しく向き合い行動できるようになるためには時に真剣に、時に楽しみながら、家庭で、地域で、学校で、職場で、いろいろな場面で防災について学び親しむ機会が増えるような北海道をつくり、次の世代へ確実に引き継いでいくことが大切です。

東日本大震災をはじめ、多くの災害を経験したこの時代を生きる私たちの使命として、ぜひ一緒に取り組みを進めていきましょう。

このテキストの活用について

このテキストは、「知識編」と「実践編」で構成されています。



●知識編

個人の学習から、さまざまな防災教育の場面まで、幅広い活用を期待しています。
「地震」「津波」「火山噴火」「風水害」「雪害」などの各自然災害ごとに、そのしくみや、平時からの備え、災害発生時や発生後にとるべき行動、北海道において過去に起きた災害事例などを掲載しています。



●実践編

市町村職員や消防職員などの防災関係者、学校や地域の防災リーダーなど、防災教育を企画し実践する方々への幅広い活用を期待しています。
防災研修など防災教育の企画の進め方やポイント、モデルカリキュラム、各地で実践されているさまざまな形の防災教育の事例などを掲載しています。

また、さまざまな防災教育情報を集めたポータルサイト、フェイスブックを開設しています。これらの情報を効果的に組み合わせ、地域の防災教育の実践に活用してください。

目次

ほっかいどうの防災教育【実践編】

Ⅰ ほっかいどうの防災教育

1．北海道の豊かな自然と防災教育 …… 2
2．防災教育推進の背景と必要性 …… 4

Ⅱ 私のまちの防災教育を企画しよう

1．企画の進め方 …… 6
2．防災教育の多様なメニュー …… 12
01. 災害・防災学習会 …… 13
02. 災害図上訓練（DIG） …… 14
03. 防災まちあるき・マップづくり …… 17
04. 室内からの非難シュミレーション …… 18
05. 避難所運営ゲーム北海道版（Doはぐ） …… 19
06. 避難所体験・運営訓練 …… 20
07. 災害対応ゲーム クロスロード …… 23
08. 防災運動会 …… 24
09. シェイクアウト …… 25
10. 幼児向け防災教育用カードゲーム「ぼうさいダック」 …… 25
11. e-ラーニング …… 25
12. 北海Do防災かるた …… 26
13. まさかは必ずやってくる啓発リーフレット …… 26
14. まさかは必ずやってくる災害映像集 …… 26
15. 北の災害食レシピ …… 26
3．防災教育モデルカリキュラム …… 27

Ⅲ 防災教育の輪をひろげるために

1．自主防災組織の立ち上げ …… 34
2．地域の防災リーダーの養成と活用 …… 36
3．いろいろな主体による取り組みをひろげる …… 38

Ⅳ さまざまな防災教育の実践事例

1．幼少期の子どもを対象とした実践事例 …… 41
2．児童・生徒を対象とした実践事例 …… 43
3．多様な形で進む防災教育の実践事例 …… 45

Ⅴ 次の世代につなげるために

1．いつも防災 …… 47
2．災害伝承 …… 48

参考資料

1．防災教育に役立つサイト集 …… 49
2．防災教育に関する情報発信 …… 50

本事業は、SDGｓ（持続可能な開発目標）のうち、次のゴールの達成に資するものです。





※SDGｓ(Sustainable Development Goals)とは、2015年９月に国連で採択された、先進国を含む2030年までの国際社会全体の開発目標で、17のゴール(目標)と169のターゲットで構成されています。

※北海道は持続可能な開発目標（SDGｓ）を支援しています。

Ⅰ ほっかいどうの防災教育

1 北海道の豊かな自然と防災教育

家庭・町内会
学校・職場で!

北海道の暮らしは、海・山・川・湖・平野・温泉と、美しく豊かな自然の恩恵を受ける一方で、自然災害とも隣り合わせにあります。
今、北海道の各地で地域特性に応じたさまざまな取り組みがひろがっています。

自然の中で



❶ 洞爺湖有珠火山マイスターによる登山学習会(壮瞥町)

親子で



❷ 子どものための防災の知恵を学ぶ「リスクと闘うママになろう!」(江別市)

公共施設で



❸ 演奏会中に大地震発生!? Kitara防災訓練(札幌市)

観光地や
ショッピングセンターで!
ラジオ、運動会、キャンプ、
まちづくりで!

観光地で



❹ 函館観光の津波防災を考える勉強会(函館市)

修学旅行で



❺ 修学旅行で奥尻島を訪問し学ぶ中学生(新十津川町)



語りべと



❻ 奥尻島津波語りべ隊による被災経験の伝承(奥尻町)

少年消防クラブで



❼ 防災学習交流施設「防災の森」にて体験学習(千歳市)

自主防災組織で



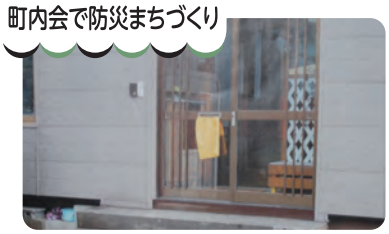
❽ 防災訓練時における避難誘導訓練(芽室町)

防災運動会



⑱町内会・職場・仲間などチームで参加する防災運動会（留萌市）

町内会で防災まちづくり



⑰玄関先の黄色いハンカチは避難済みの目印（稚内市）

専門家と一緒に



⑯炭酸を使った噴火実験など楽しく学ぶ十勝岳防災学習教室（美瑛町）

地図を囲んで、まちを歩いて、
自然の中で!

厳冬期に



⑮オホーツク地域における厳冬期避難所演習（北見市）

防災キャンプ



⑭高校生をリーダーに小中学生が一緒に学ぶ防災キャンプ（厚岸町）

多世代へ発信!

コミュニティFMで



⑬FMくしろで図上訓練の様子を放送（釧路市）

幼稚園で



⑫毎週、抜き打ち避難訓練を実施（釧路市）

親子で、友達と、同僚と。
専門家や、防災マスター、
消防団員と!

北海道の暮らしのさまざまなシーンで防災教育がひろがっています

防災マスターと



⑨とかち防災マスターネットワークの防災活動（帯広市）

女性消防団員と



⑩女性消防団員が幼稚園を訪問（日高町）

地域みんなで

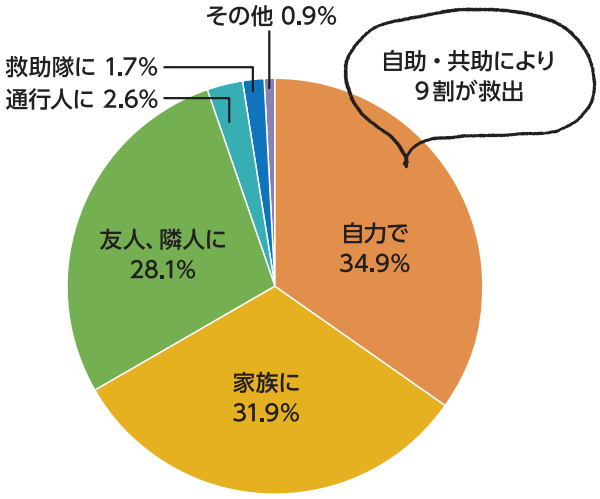


⑪地域住民と障がい者が連携した避難訓練（浦河町）

2 防災教育推進の背景と必要性

多くのいのちを救った自助・共助

平成7年(1995年)に発生した阪神・淡路大震災では、6,434人にのぼる命が失われました。地震直後に倒れた家屋の下敷きになった人々の多くは、家族や近隣住民によって救助されました。地震直後のすばやい救出活動のためには近隣住民の力が必要であり、そのためには日ごろからのつきあいや、地域を知っておくことの大切さが認識されました。平成23年(2011年)に発生した東日本大震災では、甚大な被害の一方で、防災教育によって助かった命も数多くあったと言われています。そのため、災害への知識、過去の教訓、自然との向き合い方などについて、地域の中で伝え続けることの大切さが再認識されました。



神戸市内において生き埋めや閉じ込められた人の救助者に関する調査結果

「兵庫県南部地震における火災に関する調査報告書」
社団法人 日本火災学会 (1996年) より

防災教育をめぐる動き

▶ 災害対策基本法の改正(平成24年(2012年)6月)

防災意識の向上を図るため、住民の責務として災害教訓を伝承することが明記されるとともに、国・地方公共団体のほか、民間事業者も含めた各防災機関において防災教育を行うことが努力義務化されました。(第7条および第46条など関係)

▶ 北海道防災対策基本条例の改正(平成26年(2014年)4月)

東日本大震災の教訓を北海道の防災対策に生かすため、平成21年(2009年)に制定した「北海道防災対策基本条例」が改正されました。改正条例では、道民の責務として災害教訓を伝承することが明記されるとともに、事業者の従業員に対する防災教育の実施や学校・保育所における防災教育の実施などが明記されました。

北海道における防災教育

海に囲まれ、豊かな自然を有する北海道では、地震や津波、火山噴火、気象災害など、さまざまな自然災害に備える必要があります。また、積雪寒冷などの気象状況や産業構造といった、北海道の特性に応じた備えも進めなければなりません。北海道ではこれまでの災害における経験や教訓を学び、備えていくため、道民の皆さんと一緒にめざす姿や理念を共有し、防災教育の輪を広げていく取り組みを進めています。

≪ めざす姿 ≫ 道民みんなで取り組む災害に強い北海道
～幅広い各層に防災教育が浸透し、自助・共助・公助が連携する社会をめざします。～

≪ 共有する理念 ≫ **「横をつなぐ」** 関係機関とともに、情報や知恵を結集し、日頃から連携協働をひろめ強めていくことにより、災害に強い地域社会をめざす防災教育の大きな潮流をつくります。
「時代をつなぐ」 次の世代の命を守るために、培われた豊富な経験や知恵を確実に伝え、一人ひとりが災害に正しく向き合い行動できるように、継続的な防災教育に取り組みます。

家庭や地域、学校、職場などあらゆる場面で、
行政や防災関係者、そして企業や団体、ボランティア、NPO、
グループや個人など、たくさんの担い手が生まれ、
防災について学び親しむための手法や機会を広げていく。
こうした動きを加速させていくために、私たち一人ひとりの力が必要です。



防災教育の意義

●防災教育は、いのちを守る取り組みです。

防災教育は、災害の起こる前から、起こったとき、そして復旧・復興までのあらゆる段階で、まずは「いのちを守る」そして、「被害を軽減する」、「回復を助ける」ことができるようになるための力を高める活動です。

防災教育の目的

1. 災害時にいのちを守り、助けることができるようになること
2. 災害対応を助け、災害から立ち直っていく過程を支えるようになること
3. ふだんから社会の防災・減災活動を支えるようになること

《 効果の例 》

災害時に適切な行動をとることができる

災害についてのさまざまな知識を持ち、いざという時に適切な行動を取ることができるようになります。

地域の未来を担う人材が育っていく

平成12年(2000年)有珠山噴火では、小学生の時に壮瞥町で防災教育を受けた方が、役場職員として災害対応にあたりました。

教育活動を通して、関係機関やキーパーソンの間に顔の見える関係が築かれる

ふだんから防災教育のためにつながりを作っておくことで、連携した災害対応に結びつきます。

地域社会の連帯感が高まり、コミュニティの「絆」がつくられる

地域の防災について共に考え、行動することを通して、住みよい地域づくり、防災以外の地域活動にも発展することが期待されます。

地域防災力が高まる

＼やってよかった／ 防災教育・災害教訓の伝承が人々を救った例

過去の被災経験が減災につながった

平成5年(1993年) 北海道南西沖地震

昭和58年(1983年)に発生した日本海中部地震により奥尻町青苗地区は津波被害を受けました。10年後の平成5年(1993年)北海道南西沖地震が発生し、わずか3～5分とかつてない速さで津波が海岸を襲いました。奥尻島では198人もの死者・行方不明者がありましたが、日本海中部地震を経験したことや、海岸の地域は津波の危険があるという教訓が言い伝えられていたことから、迅速に避難し助かった命もたくさんあります。

防災教育で生まれた信頼関係で人的被害ゼロの実現

平成12年(2000年) 有珠山噴火

壮瞥町では、昭和58年(1983年)より「子ども郷土史講座（壮瞥町教育委員会）」や「昭和新山・有珠山登山会」など、活火山のフィールドを生かした防災教育を継続して実施してきました。また、これらの事業を通じ、専門家、行政、住民の信頼関係が構築され、平成12年(2000年)の有珠山噴火の際には、噴火前に1万人の避難が完了し、人的被害ゼロを実現しました。

防災教育が救った多くのいのち

平成16年(2004年) インド洋大津波

平成16年(2004年)に発生したインド洋大津波では約23万人の犠牲者がでました。その中で、事前の防災教育の教えから多くの人命を救った英国人少女がいました。ティリー・スミスちゃんは、家族でクリスマス休暇を過ごすため、タイのプーケットに来ていました。ホテルの前で泳いでいると、海が突然泡立ち、遠くの船が上下に大きく揺れるのを見ました。彼女は授業で習っていた「津波」を思い出し、両親に「これ津波だよ。すぐに陸に上がらないと危ない」と声をかけました。両親もその言葉を信じ、周りの人々に声をかけました。海やホテルの従業員約100人は、近くの高台へ避難し被害を逃れました。

多くの子どもたちが実践した日ごろの防災教育

平成23年(2011年) 東北地方太平洋沖地震

東北地方太平洋沖地震による津波では、多くの子どもたちが事前の防災教育により、自らの命を守ることを実践しました。そのひとつの事例として、釜石市では死者・行方不明者が1,000人以上にのぼりましたが、市内の小・中学生2,926人中、学校を休んでいたなどの5人を除く全員が津波から逃れることができたことが挙げられます。この釜石の子どもたちの行動は「釜石の奇跡」と呼ばれ、地域と専門家が連携し、継続して防災教育に取り組んできた成果として、注目を集めています。

Ⅱ 私のまちの防災教育を企画しよう

1 企画の進め方

防災教育を実践するには、どのように企画すると良いのでしょうか。
ここでは、企画案の作成までの基本的な進め方を紹介します。

STEP 1	STEP 2	STEP 3	STEP 4	
事前準備	対象と伝える内容の検討	手法の検討	時期・会場などの設定	企画案の作成
地域特性や想定される災害などの把握	課題を捉え、対象と伝える内容の整理	対象と伝える内容に応じた手法の検討	実践する環境の整備	

STEP 1 地域特性や想定される災害などを考えましょう。（事前準備）

広大な北海道は、海・山・川・湖・平野など地理的な特徴や農業・林業・水産業・観光産業などの産業構造といった地域の特性もさまざまで、想定される災害の種類や規模、それに対する備えや対処なども異なります。
企画の事前準備として、まちの歴史を記した書籍や統計資料などにより、防災・減災の視点から地域の特性を再確認するとともに、地震、津波、火山噴火、風水害など、どのような災害が想定されるのかを整理しましょう。



STEP 2 課題を捉え、対象と伝える内容を考えましょう。（対象と伝える内容の検討）



企画にあたっては、はじめに自分の住むまちや地域で、災害に弱い部分はどこか課題を考えてみましょう。そしてその課題を克服し、地域の一人ひとりが災害時にしっかりと判断・行動するためには「“誰”に“何”を伝えたらよいか」対象と内容を整理しましょう。このとき、STEP 1で整理した「地域特性」や「想定される災害の種類・規模」などがヒントとなります。
例えば、雪が多く高齢者が多い地域、沿岸の浸水想定区域に人が住んでいる地域、観光産業が盛んで来訪者の多い地域、融雪期に河川の氾濫が多い地域…などが考えられます。

Q どのような層を対象にするか？

- 地域住民（年齢、性別…）
- 特定の集団（福祉・医療関係者、要配慮者…）
- 当該地域で働く人々（民間企業…）
- 防災リーダー（消防団員、地域防災マスター…）
- 市町村職員　●観光客…

Q どのような内容を伝えるのか？

- 過去の被災経験（語り継ぎ…）
- 災害の教訓
- 災害情報（緊急地震速報…）についての知識
- 災害の怖さ
- 災害対応の方法　●心構え、生き方…

STEP 3 対象と伝える内容に応じた手法を考えましょう。（手法の検討）

対象と伝える内容が決まったら、次にこれらに効果的な手法を考えましょう。12ページの【2 防災教育の多様なメニュー】に掲載している手法やオリジナルの手法を単独あるいは組み合わせて、課題に対応し、わかりやすく、そして、できるだけ楽しく参加しやすい企画となるよう検討しましょう。

Q どのような手法で実践するか?

- 講義・講演
- サイエンスカフェ
- 現地学習
- ゲーム
- ワークショップ
- 展示
- 映像・テキスト類を使って…

STEP 4 実践する環境を整えましょう。（時期・会場などの設定）

対象、伝える内容、手法がまとまったら、講師の選定や実施時期・会場設定を検討しましょう。

● 講師

企画したメンバー自らが行う場合や外部に依頼する方法があります。講師を検討する場合は、地元の気象台や消防・防災関係機関、福祉・教育関係機関、各（総合）振興局などに相談したり、ポータルサイト「ほっかいどうの防災教育（URL：http://kyouiku.bousai-hokkaido.jp）」などで探してみましょう。

● 時期

対象者や地域の実情（日中・夜間、繁忙期などの考慮）に合わせて検討し、できるだけ集まりやすい時期に設定しましょう。

● 会場

手法に合わせ、適切な規模で実施可能な空間を確保できるよう、検討しましょう。

Q いつ実施するのか?

- 実施する季節、日時など、対象に合わせて検討
- 9月1日の「防災の日」などをきっかけに…

Q どこで行うのか?

- 教室・会議室・体育館・ホール
- 商業施設など不特定多数が訪れる場所
- 屋外
- 被災地（バスツアーなど）…

最初の一歩を踏み出す際にはいろいろな苦労があるかもしれませんが、少しずつ段階を経ながら、まずは始めることが大切です。そして、あなたのまちならではの、まさに「オーダーメイドの防災教育手法」で継続して取り組むことをめざしましょう。

防災教育にはさまざまなアプローチがあります

イベントやお祭り、運動会など、地域の恒例行事で防災教育を取り入れてみましょう。
これまで防災に対する関心が低かった層への普及や継続した防災教育の実践に効果的です。
子育てサークルで非常持出品の準備について考えてみたり、地域の夏祭りで、灯かりづくり体験を行うなど、ちょっとした工夫で、簡単に防災教育に取り組むことができます。



ポイント

★行事やイベントの参加者層に合わせた内容にしましょう。
★短時間で気軽に体験できる内容にすると参加しやすくなります。
★パネルやグッズ展示など自由に閲覧できるものや、パンフレットの配布も有効です。



企画から実施に向けた詳細は、【企画から実践までの流れ ▶P10】を参照してください。

企画のポイント

point! 1



関係機関などとの連携・協力

効果的な企画を立てるためには、検討段階から関係機関などに相談や連携・協力のお願いをしてみるとよいでしょう。

●検討段階から相談しましょう。

異なる視点からのアドバイスや講師などの情報が得られる可能性があります。

●いろいろな連携・協力先を模索しましょう。

市町村や気象台、消防・防災関係機関、福祉・教育機関、（総合）振興局、北海道地域防災マスターなど、北海道で防災教育を推進する際にサポートを得られる機関は多数あります。【Ⅲ 防災教育の輪をひろげるために▶P34】

◆連携のイメージ

〈 災害図上訓練（DIG） 〉



〈 防災まちあるき 〉



point! 2



参加しやすい環境づくり

防災教育の企画内容によっては、難しいイメージを持たれてしまう場合があります。企画にあたっては、その対象に合わせ、参加しやすい環境づくりを心がける必要があります。

●対象に合わせ、参加しやすい時間や場所を選ぼう。

例えば、親子を対象とする場合は休日、企業は平日、商店街は閉店後の夕方など、参加しやすい日時を選びましょう。また、人が集まるところに出向いたり、避難所に指定されている施設など、参加しやすい場所を選びましょう。

●対象に合わせ、興味を引く内容を取り入れよう。

家事にも活かせる避難食レシピづくり、子どもと一緒に体験できる灯かりづくり、被災地を訪れてのフィールドワークなど、対象が興味を引く内容を取り入れると効果的です。

point! 3



対象に合わせた積極的な広報・周知

できるだけ多くの人に参加してもらうためには、開催する講座を事前に広く周知することが重要です。

●できるだけ早く広報しよう。

企画内容の案内をできるだけ早いタイミングで作成し、広報しましょう。自治体や関係団体などを通じて広く周知してもらうなど、広報の方法を工夫してみましょう。

●対象者が一番目にする広報媒体を活用しよう。

参加者を町内会など地域を限定して募集する場合は、回覧板やチラシを活用。広く町内全域を対象とする場合は、広報誌に掲載したり、公共施設などで掲示をするといった、対象者に合わせた周知を行うことが重要です。特に、地域に広く周知する場合は、コミュニティFMや地方新聞での告知など、地元メディアに協力を依頼することも効果的です。

●学校や民間企業などに協力を求めるのも効果的。

学校や民間企業などに直接呼びかけ、参加者を募集することも効果的です。

point!!

4 厳冬期に災害が起きた場合を想定しよう



積雪寒冷地である北海道では、厳冬期における災害の発生を想定した備えが必要となります。冬季の備えが「生命に関わる重要な要素」であることを学べる内容を盛り込みましょう。

●冬を想定した防災教育のプログラムを検討しよう。

北海道で冬季に災害が起き、停電などにより電気が使用できなくなると、9割以上の暖房設備が停止するといわれています。暖房設備のない状態が24時間以上続くと、凍死をはじめとする二次被害の発生が考えられます。冬を想定した防災教育のプログラムを検討し、冬季の災害に備えることが重要です。



COLUMN

防災に関わる日をきっかけとして始めよう

防災の日
(9月1日)
防災週間
(8月30日~9月5日)

9月1日は「防災の日」です。この日は大正12年(1923年)9月1日に発生した「関東大震災」に由来するもので、国民一人ひとりが災害について認識を深め、これに対処する心構えをするために創設されました。この日を含む1週間は「防災週間」と定められており、毎年各地で防災訓練などが実施されています。そのほかにも、過去に起きた災害の日を忘れないように、防災に関係する記念日が設定されています。このような日をきっかけとして、家族や周囲の人たちと一緒に防災について考えてみませんか。

＊ 防災に関わるさまざまな日

釧路沖地震 **(1月15日)**	平成5年(1993年)1月15日に釧路市南方沖を震源として地震が発生し、釧路や十勝地方を中心に、死者2人、負傷者966人、住宅全壊53棟、住宅半壊254棟の被害が発生しました。釧路市では、毎年1月15日ごろに「防災ワンデー」として関係機関が連携し、地震・津波災害から身を守るための講演会などを行っています。
チリ地震津波 **(5月24日)**	昭和35年(1960年)5月24日の早朝に来襲したチリ地震津波で大きな被害を受けた浜中町では、この津波を忘れないために毎年5月24日に津波防災避難訓練を行っています。
北海道南西沖地震 **(7月12日)**	平成5年(1993年)7月12日に北海道南西沖を震源地とする地震が発生し、震源地近くの奥尻島をはじめ、全道で死者201人、行方不明者28人を数えるなど津波によって大きな被害を受けました。奥尻町の小学校では、毎年7月12日ごろに避難訓練を実施しています。
胆振東部地震 **(9月6日)**	平成30年(2018年)9月6日未明に発生した北海道胆振東部地震は、北海道でかつて経験したことのない最大震度7を記録し、死者44人と多くの尊い命が失われました。胆振管内の市町村では、9月6日を「胆振防災教育デー」として、すべての小・中・義務教育学校で避難訓練などに取り組んでいます。
津波防災の日 **(11月5日)**	安政元年(1854年)11月5日に発生した安政南海地震による津波の際に、稲むら(稲のたば)に火をつけて暗闇の中で逃げ遅れた人たちを高台に避難させて救った「稲むらの火」の逸話にちなむものです。津波防災の意識を高めるために創設された比較的新しい記念日です。北海道では、令和元年(2019年)9月10日・11日に44ヵ国の高校生が集まり「世界津波の日」2019高校生サミットin北海道が開催されました。
防災とボランティアの日 **(1月17日)**	平成7年(1995年)1月17日に発生した「阪神・淡路大震災」にちなんで制定された日で、広く国民が災害時におけるボランティア活動および自主的な防災活動についての認識を深めるとともに、災害への備えの充実強化を図ることを目的とした記念日です。
東日本大震災 **(3月11日)**	平成23年(2011年)3月11日、三陸沖を震源に東北地方太平洋沖地震が発生し、巨大津波が引き起こされるなど死者18,958人、行方不明者2,655人(平成26年(2014年)3月7日現在)と甚大な被害が発生しました。この日を教訓として各地で防災教育の取り組みが行われています。

企画から実践までの流れ

ここでは、防災教育の企画から実践までの基本的な流れを紹介します。

チェックで確認！

事前準備

企画・会場準備・講師手配など（6カ月前～1カ月前）

STEP 1 ▶ STEP 2・3・4 ▶ STEP 5

地域の特性や想定される災害などの情報収集

1 図書館や資料館で、まちの郷土史を調べてみましょう。

□図書館にある郷土誌や、資料館の展示などには、まちの歴史とともに起こった災害も記録されていることが多く、当時の様子を知る手がかりになります。

2 インターネットで、まち・道・国の災害情報を調べてみましょう。

□市町村:自分のまちのホームページで防災情報を収集。
□北海道:「災害情報」のページで、地域の災害履歴を調査。
□北海道開発局:「防災災害情報」でハザードマップを探す。



3 各市町村担当者・各(総合)振興局の防災担当や防災の専門家に聞いてみましょう。

□まちのハザードマップや防災ガイドブックなどの資料や防災対策などの情報が得られます。まちにどのような情報があるか電話で問い合わせると効率的です。



Ⅱ 私のまちの防災教育を企画しよう
▶企画の進め方 STEP1▶P6

まちに合った防災教育の企画

1 防災教育の企画を考えましょう。

□まずは、何のために防災教育を行うのか目的を整理してみましょう。そして、目的を達成するための対象、手法、場所、時期などを考えてみましょう。
□対象・伝える内容の検討
□手法の検討
□時期・会場などの設定

Ⅱ 私のまちの防災教育を企画しよう
▶企画の進め方 STEP2～4▶P6-7

2 企画書を作成しましょう。

□実施内容を企画書にまとめましょう。

★企画書に記載する内容の例
・目的・テーマ
・開催日時・場所
・実施対象
・実施内容（防災教育カリキュラムなど）
・講師
・実施主体（主催）
・協力機関

3 予算書を作成しましょう。

□企画書と合わせ予算書を作成しましょう。

★予算書に記載する内容の例
・会場費・設備使用料
・材料費
（例：模造紙、ペン、付箋紙など）
・講師旅費・謝金など
・資料印刷費

4 周知方法を検討しましょう。

□実施対象者の目に触れやすい広報媒体を選びましょう。

関係機関への相談・調整

1 関係機関へ相談・協力を依頼しましょう。

□講師に関すること
□運営サポートに関すること
□会場に関すること
□広報に関すること
□参加者の募集に関すること

2 講師へ依頼しましょう。

実施内容がおおむね確定したら講師への打診・依頼を行いましょう。

□講師への打診
依頼手続きを行う前に、企画書を送付し、内諾をもらいましょう。講師には地域の特性や課題、何のために行う企画かをしっかりと伝えましょう。

□講師依頼書の作成・送付
講師の依頼書は、書式が定められている場合がありますので、先方に確認し作成・送付しましょう。



Ⅱ 私のまちの防災教育を企画しよう▶企画

実践準備（3カ月前～1週間前）

STEP 6 参加者の募集

1 案内・チラシなどを作成し、参加者を募集しましょう。

□参加者を募集する案内やチラシを作成しましょう。

★案内・チラシに記載する内容の例
・目的・テーマ
・開催日時・場所
・実施内容
・参加対象
・参加費
・持ち物、服装
・申し込みの有無・方法
（名前、住所、電話番号、性別、年齢など）

□申し込みについては、グループ分けや保険加入が必要な場合など、適宜必要な情報の記載をお願いしましょう。

2 広報を行いましょう。

□広報は、早ければ早いほど効果的です。遅くとも1カ月前までには告知しましょう。
□市町村の広報誌や地元のマスコミなどにも協力をお願いしてみましょう。



STEP 7 実施計画書の作成・使用備品の準備

1 参加者をとりまとめ、グループ分け、保険加入など必要な手続きを行いましょう。

□参加者名簿の作成
（人数、グループ分けなど）
□保険加入
屋外の活動など、必要に応じ保険への加入を行いましょう。

2 当日の運営がスムーズに進行できるよう実施計画書を作成しましょう。

□進行台本
□会場の案内サイン
□会場の配置図
（テーブルの並べ方など）
□準備品リスト
□緊急連絡先など

3 講師・協力機関と当日の流れについて調整しましょう。

□配布資料の有無
□当日の動き（交通手段など）

4 会場の管理者と調整を行いましょう。

□会場配置
□使用料など
□使用備品など

5 資料や備品を準備しましょう。

□当日プログラム
□配布資料
□アンケート
□使用備品の手配

のポイント▶P8-9

実践（当日）

STEP 8 当日の運営・記録

1 会場準備

□会場設営
□講師・関係者との進行確認

2 開場・受付

□名簿チェック
□資料・名札の配布

3 防災教育の実践

□司会進行
□記録撮影
係を決め、実施状況を記録しておくと、その後の参考になります。

4 アンケートの実施・閉会

□アンケートの回収
良かったこと、改善した方が良いことなど、参加者の声を聞くアンケートを実施すると参考になります。

5 あと片付け

□会場の現状復帰
□掃除
□忘れ物のチェック



ふりかえり

STEP 9 効果検証と課題や改善策の検討

1 効果検証を行いましょう。

□アンケート結果と当日の様子から、効果と課題を抽出しましょう。

2 改善策について検討しましょう。

□課題を踏まえ、次回の企画内容へ活かす改善策を検討しましょう。

ふりかえりの打ち合わせを必ず行い、継続した防災教育を実践しましょう。



2 防災教育の多様なメニュー

防災教育の実践にあたっては、さまざまな手法やメニューがあります。目的や対象に応じた効果的なメニューを選択し、組み合わせながら、地域に合ったカリキュラムを作成しましょう。

さまざまなメニューを組み合わせてカリキュラムをつくりましょう

災害が発生した際にいのちを守るためには、「災害に関する知識を身に付ける（A）」とともに、「自分の身の回りの環境を良く知る（B）」、これらの「知識を活かして適切に行動する（C）」ことが必要となります。防災教育のカリキュラムを組み立てる際には、このA・B・C の3つの要素を基本に単体あるいは組み合わせてカリキュラムをつくると効果的です。

カリキュラムの基本	
A.	災害に関する知識を身に付ける
B.	自分の身の回りの環境を良く知る
C.	知識を活かして適切に行動する

A ＋ B ＋ C を基本に
カリキュラムを組み立てる

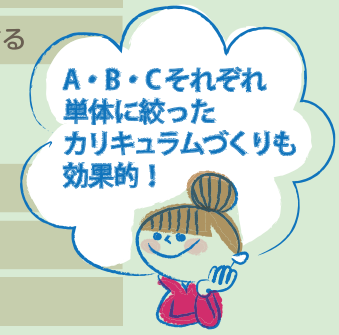
●例えば

〈 災害図上訓練（DIG）を企画する場合のカリキュラム例 〉

A. 災害知識	地域の災害特性を知るミニ講義
B. 地域環境	災害図上訓練（DIG）の実践で地域の状況を知る
C. 行　動	Bの実践結果を参加者で共有し、地域の避難経路などを検討する

〈 防災イベントを企画する場合のカリキュラム例 〉

A. 災害知識	防災知識パネル展・津波実験装置などによる科学実験
B. 地域環境	地域のハザードマップ・パンフレットの配布
C. 行　動	目隠し避難体験で、避難のシミュレーション



防災教育の主なメニュー

ここでは、防災教育のメニューの一部を紹介します。このほかにもさまざまなメニューが実施されています。目的や対象に合わせ、メニューを選びましょう。

01. 災害・防災学習会 …… P13
02. 災害図上訓練（DIG） …… P14
03. 防災まちあるき・マップづくり …… P17
04. 室内からの避難シミュレーション …… P18
05. 避難所運営ゲーム北海道版（Doはぐ） …… P19
06. 避難所体験・運営訓練 …… P20
07. 災害対応ゲーム クロスロード …… P23
08. 防災運動会 …… P24
09. シェイクアウト …… P25
10. 幼児向け防災教育用カードゲーム「ぼうさいダック」 …… P25
11. e-ラーニング …… P25
12. 北海Do防災かるた …… P26
13. まさかは必ずやってくる啓発リーフレット …… P26
14. まさかは必ずやってくる災害映像集 …… P26
15. 北の災害食レシピ …… P26

01. 災害・防災学習会

★地域の自然や環境の特性を学び、防災を考える。

講義

テーマに合わせ講師を選定することにより、さまざまな角度から災害について知識を得ることができます。参加者の属性や関心に応じた内容にすることも可能です。



気象台職員による、地域の気象特性についての講義

●地域のことを学ぶ

地域で過去に起きた災害、起こりうる災害、ハザードマップの見方、天気図の見方などを具体的に説明すると、参加者の関心がより高まります。

●災害のしくみや災害による被害について学ぶ

各機関がホームページやDVDなどで提供している研修用の映像資料は、参加者の意識を高めるために活用できます。ただし、衝撃的な災害映像は参加者に精神的ショックを与えかねないため、使用の際には留意する必要があります。

●体験に基づく講演を聴く

被災地から語り部などを招き、体験に基づく講演を行うことも効果的です。

パネルなどの展示

●集客施設やイベント会場などでの展示

防災に関するパネル展示、実験装置などによるさまざまな自然現象の再現や映像の放映は、地域の災害や災害を引き起こす現象の理解につながります。また、不特定多数の人に関心を持たせたり、参加者とスタッフの交流が生まれる場合もあります。



釧路地方気象台の津波実験装置

●研修会場などでの展示

研修会場などにおける展示は、参加者が研修前後や休憩時間を活用して、自らの知識を深めることにつながります。

フィールドワーク・施設見学

災害のしくみ・影響など地域の災害を知るために、見学や体験をすることも効果的です。



洞爺湖有珠山ジオパークでの体験学習

●地域の博物館や郷土資料館で調べる

身近な博物館や資料館、寺や神社などで過去の災害の記録や石碑などを調べることは、災害の歴史を知るとともに、郷土への理解を深める上で重要です。

●フィールドワーク・体験施設で学ぶ

災害遺構（有珠山噴火遺構など）や、防災の対策施設（砂防ダムなど）を見学したり、地域の防災センターなどを訪れることも有効です。札幌市や釧路市、千歳市などの防災センターには、さまざまな災害の体験設備も備えられています。【学べる施設▶P40】

02, 災害図上訓練（DIG）

★災害を想像する。～「災害を知る」「まちを知る」「人を知る」



ねらい
DIGは災害発生を想定して、ふだんは意識しない地域の防災課題に気づき、自分の生活のあり方や、地域の人との関わり方について見直すことをねらいとしています。

対象
地域住民（町内会、自主防災組織）、児童・生徒、消防団、市町村職員、観光事業者など

効果
地域の防災対策における現状と課題が明らかになり、参加者の防災意識と連帯感が向上します。

概要
災害図上訓練（DIG）とは地域で地震など大きな災害が起きた場合を想定し、参加者全員で対応を考えるものです。大きな地図にみんなで書き込みながら、楽しく議論をする防災訓練のひとつです。

進め方

● 人数／1グループ6～8人程度　● 時間／2～3時間程度

ここではDIGの一例をご紹介しますが、DIGにはさまざまな方法があります。参加者の状況に応じて時間や内容を調整しましょう。

1 「DIG」の説明

講師がDIGの概要を簡単に説明します。

- ○ 災害発生を具体的に想定する。
- ○ 参加者が地図を囲み、地域の防災施設の位置や災害時要配慮者のいる住宅を確認し、議論を交わす。
- ○ 地図に書き込みをすることで、地域の防災マップができあがる。
- ○ 災害時要配慮者への対応など、日ごろ気づかなかった地域の防災上の課題に気づく。
- ○ 参加者の防災意識と連帯感の向上をめざす。

2 グループ分け

事前にグループ分けをしても良いですが、簡単なゲームを通してグループ分けをすると、参加者の緊張をほぐすのに効果的です。（アイスブレイク）

3 自己紹介

DIGは、参加者同士が楽しく意見を出し合うことが大切なので、発言しやすい雰囲気づくりをします。自己紹介では、名前だけでなく「私は避難所で何ができるか」、「私は日ごろこんなことをしています」など、話題を増やしてグループ内の緊張感を解いてから、グループのリーダーを決めます。

4 被害状況の説明

参加者が被害の状況をイメージしやすいように、具体的な災害を想定します。

例）「2012年1月17日午前5時46分、○○沖でマグニチュード8.0、震度6強の地震が発生しました」

その他の想定例
- ・自分と家族は無事　・室内は家具などが倒れ散乱している
- ・電気、水道、ガス、電話はストップ
- ・津波の心配がある　・火災の発生も予想される
- ・自宅の周辺で倒壊している建物がある…など

準備するもの

★グループごと
- ☑町内周辺の地図（例えば、住宅地図を拡大したもの・90×120cm程度）
- ☑透明ビニールシート（地図にシートをかぶせれば何回でも使えます）
- ☑模造紙
- ☑油性ペン（色分けできるように8色以上、太めのもの）
- ☑付箋紙（7.5×5cm程度・一人につき約20枚）
- ☑ペンまたは鉛筆（付箋紙の記入などに使用・一人につき1本）
- ☑カラーシール（4色以上・各シート1枚・直径1cm程度）
- ☑セロハンテープ（地図と透明ビニールシートの固定に使用）
- ☑はさみ
- ☑ベンジン（ペンを消す際に使用）
- ☑ティッシュペーパー

◆会場準備
1グループ6～8人程度が座れるように、横長の会議用机2～3脚を並べます。机に地図を広げて、その上に透明ビニールシートをかぶせて固定します。さらにその上に模造紙を載せます。

DIGは、Disaster（災害）、Imagination（想像）、Game（ゲーム）の頭文字を取って名付けられました。dig（動詞）には、「掘り起こす、探求する、理解する」という意味があり、「防災意識を掘り起こす」、「地域を探求する」、「災害を理解する」という意味も重ねて名付けられています。

5 災害発生時「あなたなら、どうする？」

次の①～④について、各自が周りの人と相談せずに付箋紙に書きます。

① 災害発生直後、あなたは何をするか？
② 災害発生から3時間後、あなたは何をしているか？
③ 避難をすることになった。あなたは家で何をしているか？
④ 避難場所に行くとき、あなたは何を持っていくか？

6 話し合い（1）

模造紙に線を引いて四等分し、①～④の番号を振ります。各参加者が書いた付箋紙の内容を、グループで話し合いながら模造紙に貼ります。この時に人の意見を否定してはいけません。なぜそう思ったのかを話し合いながら、同じ意見の付箋紙は上に重ねていきます。

7 災害発生時の行動について助言

参加者が考えた災害発生時の行動について、講師が防災の専門家の立場で助言をします。

○ 災害用伝言ダイヤル（171）の活用法　○ 市町村が出す「避難指示」への対応
○ 避難時にしておくこと　○ 避難時に持参すると役立つもの　○ 災害時要配慮者への対応・・・など

8 地図への書き込み

地域の防災施設 をペンで色分けして記入します。	■自宅 ■避難場所 ■コンビニエンスストア・ドラッグストア ■公的機関（警察・消防など） ■医療機関 ■幹線道路（緊急車両通行路） ■河川・湖沼 ■消火栓 など
要配慮者がいる住宅 に丸形のカラーシールを色分けして貼ります。	●高齢者 ●障がい者 ●外国人 ●乳幼児・妊婦 など

その他、地域で起こりうる被害を書き加えます。　・土砂崩れ　・河川氾濫　・大規模火災　・建物崩壊　など

9 話し合い（2）

自宅から避難場所までの避難経路を書き込みます。その際、シールを貼った災害時要配慮者の避難についても話し合います。交通渋滞や道路寸断、冬季の積雪や火災の発生、風雪時などさまざまな悪条件も追加するとよいでしょう。特に津波を想定したDIGでは、近くの避難所までの避難を考えるだけではなく、最大限安全な避難場所や避難方法について検討することも重要です。

10 成果の発表

作成した地図と話し合った内容をグループごとに発表します。ほかのグループの発表を聞くことで、さらに深く防災活動のあり方を考えることにつながります。また、全グループが同じ地図でDIGを行った場合は、透明ビニールシートを他グループと重ね、その違いを見ることで、その地域の総合的な防災マップとすることができます。



11 DIG全体について講評

全体のまとめとして、話し合いの様子や発表の内容について講師がコメントします。地域の課題が明らかになった時には、それをどう解決すべきかについて話し合い、具体的な解決策に必要な備えをしていきましょう。

●出典　一般社団法人 北海道町内会連合会「あなたのまちで災害図上訓練DIGをやってみよう！」実践編（平成24年9月発行）
http://www.d-choren.or.jp/pdf/dig201209.pdf

COLUMN

地図を準備しよう!

災害図上訓練（DIG）、防災まちあるきなどには地域の地図が欠かせません。
地図を準備するには次のような手法があります。地図を貼り合わせることで、必要なサイズの大きなものを作成します。

① 市町村が保有する地図

市町村の担当窓口に相談してみましょう。地域によっては、ハザードマップや立体地図がある場合もありますので、必要に応じて活用しましょう。

② 地理院地図

国土地理院が提供しており、最新の電子国土基本図のほかに、用途に合わせて白地図や淡色地図などの切り替えができます。表示されている任意の縮尺レベルで地図をA3まで印刷することが可能です。また、空中写真も表示することができます。



③ 民間の地図

住宅地図や道路地図も利用可能です。

④ 民間のマップウェブサイト

民間企業が提供している無料の地図提供サイトにも、利用可能な地図があります。

図上訓練のいろいろ

図上訓練にも、いろいろな手法があります。目的やニーズ、対象などに合わせて手法を選択しましょう。

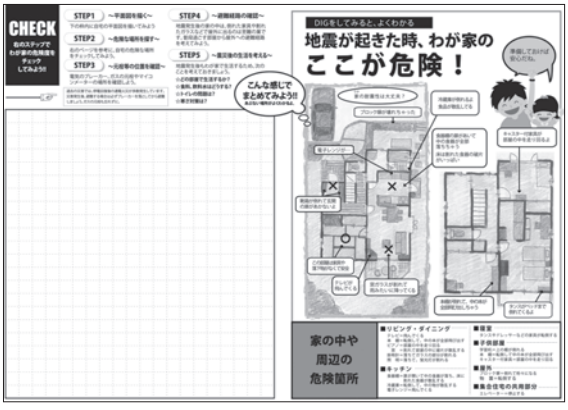
図上訓練の種類	概　要
状況予測型図上訓練 （イメージトレーニング方式）	必要最小限の付与データから適当な経過時間ごとの具体的な災害状況などを参加者自身が予想し、それをシナリオ代わり（前提）にしたときにどのような意思決定と役割行動が求められるかを答える形式の訓練です。
災害図上訓練DIG （災害想像力ゲーム）	自主防災組織やボランティア団体と共同することにより容易に実施できる図上型訓練手法です。対象となる災害や参加者の立場・役割に応じてさまざまな形式がとられます。詳細は、14〜15ページ「02. 災害図上訓練（DIG）」をご覧ください。
図上シミュレーション訓練 （ロールプレイング方式）	災害時に特定の状況下で予想される状況などを記述したシナリオ（状況付与票などによる）を参加者へ付与し、それに対して参加者が行うべき意思決定・役割行動を回答する（連絡票などによる）形式で進行する図上訓練です。

●参考サイト　消防防災博物館　https://www.bousaihaku.com/cgi-bin/hp/index.cgi

『家庭内DIG』をやってみよう

『家庭内 DIG』とは、大地震が起きたとき、自宅でいのちを落とさないように、けがをしないようにするにはどうすればいいのかを考える図上訓練です。自宅の間取り図を使って、家の中や周辺の危険箇所を洗い出したり、災害時に必要となる準備品をどこに備えておくかについて、家族で話し合いをします。この訓練は静岡県危機管理部により考案されました。各家庭で防災を考えるきっかけとして、『家庭内 DIG』を使って話し合いをしてみましょう。





出典：静岡県危機管理部

● 参考サイト　静岡県危機管理部　https://www.pref.shizuoka.jp/bousai/chosa/kateinaidig.html

03, 防災まちあるき・マップづくり

★地域の状況を知る。



概要

まち中を歩きながら災害時や避難の際に危険な箇所、防災に関する施設や設備などの安全なところを地図にチェックし、防災マップにまとめる実践的な活動です。

ねらい

地域を歩いてよく知ることで、自分たちのまちへの関心を持ち、防災意識を高めることをねらいとしています。

対象

地域住民（町内会・自主防災組織・学校など）

効果

さまざまな視点を持って自分たちの住む地域を歩くことで、防災に対する新たな発見が生まれます。また、マップづくりを通して参加者同士が話し合いをすることで、お互いに顔見知りの関係となり地域のコミュニティがさらに活性化するきっかけとなります。

進め方

●人数／1グループ6～8人程度　●時間／3時間程度

1 防災まちあるきの方法説明

グループを分け、役割を決めます。講師が避難場所や危険箇所などのチェック項目について説明します。



2 防災まちあるき

グループごとにまちあるきを行い、避難経路や危険箇所などをチェックしデジタルカメラで撮影します。

3 防災マップづくり

まちあるきでチェックしたことに基づいて、防災マップを作成します。

4 グループディスカッション

マップを見ながら、グループごとに地域の問題点や課題について話し合います。さらにどうしたら安全になるかを考え、付箋紙に書いて地図に貼ります。

5 グループごとの発表

グループごとに話し合ったことを発表し、全員で地域に必要な防災対策について考えます。

6 マップの展示・配布

完成したマップを展示したり配布したりして、地域の人に知ってもらうことも重要です。



まちあるきで気がついたところにシールを貼ります。
- 赤シール・・・危険な所
- 緑シール・・・安全な所
- 黄シール・・・気がついた所

準備するもの

★グループごと

【防災まちあるき用】
- ☑町内周辺の地図（例えば、住宅地図を使用・30×40cm程度）
- ☑地域のハザードマップ
- ☑画板
- ☑付箋紙（大・小それぞれ適量）
- ☑ボールペン（付箋紙の記入などに使用・一人につき1本）
- ☑デジタルカメラ（危険箇所などの撮影・記録用）

【防災マップづくり用】
- ☑町内周辺の地図（例えば、住宅地図を拡大したもの・90×120cm程度）
- ☑透明ビニールシート（地図にシートをかぶせれば何回でも使えます）
- ☑模造紙
- ☑油性ペン（色分けできるように8色以上、太めのもの）
- ☑付箋紙（大・小それぞれ適量）
- ☑カラーシール（4色以上・各シート1枚・直径1cm程度）
- ☑はさみ
- ☑セロハンテープ（地図と透明ビニールシートの固定に使用）
- ☑パソコン・プリンター（写真プリント用）

ポイント

防災マップを作成する際に、撮影した写真を貼ると地域の課題や問題点についてより具体化することができます。

●参考サイト
日本損害保険協会　ぼうさい探検隊　https://www.sonpo.or.jp/about/efforts/reduction/bousai/index.html
シルバー「ぼうさい探検隊」プログラム　https://www.sonpo.or.jp/about/efforts/reduction/bousai/silver/index.html

04 室内からの避難シミュレーション

★避難の難しさを体験する。



ねらい 夜間の災害発生時に、暗闇の中で室内から外に避難する大変さを知ってもらうことをねらいとしています。

対象 地域住民（町内会・自主防災組織・学校など）

効果 懐中電灯など避難時に必要な防災グッズを準備したり、家具の固定をするなど、室内における安全対策の意識を高めます。

概要 停電時の暗闇の中で、転倒した家具やガラスなど散乱物のある室内から外部へ避難することの難しさを模擬体験するプログラムです。

進め方

●時間／10〜20分

1 イメージシミュレーション

目をつぶり、寝室から玄関を出るまでを頭でイメージします。講師が時間を計り、参加者が玄関に出たと思ったタイミングで手を挙げます。



2 室内避難体験

次に、停電時の暗闇を想定し、参加者がアイマスクをつけた状態で避難準備をします。まず、外着を想定したスエット上下を着用し、次に外に出る（避難所に行く）ため玄関に移動し靴を履きます。その時間を計測し、イメージシミュレーションでかかった時間と実際にかかった時間を比較します。

目隠しをした人が転倒してケガをしないよう、一人ずつ補助者をつけて、十分に安全を確認します。

準備するもの

- ☑ アイマスク（目隠し用のタオルでも代用可）
- ☑ スエット上下（大きめサイズ）
- ☑ 長靴（大きめサイズ）
- ☑ 枕
- ☑ ブルーシート
- ☑ ストップウオッチ



COLUMN

楽しい雰囲気づくり（アイスブレイク）いろいろ

グループで意見交換を行う研修会では最初に参加者の緊張を解きほぐし、コミュニケーションをしやすい雰囲気づくり（アイスブレイク）を行います。
例えば、自己紹介をするときに、名前だけでなく好きなものを紹介したり、会場設営を参加者全員で行うことで、初対面でも緊張が和らぎます。また、研修会の時間が長い場合は休憩時間を設け、飲み物や防災食などを準備すると日ごろの備えなどの話題も広がり、参加者が打ち解け、開放的な雰囲気につながります。

自己紹介

自己紹介の際に名前だけではなく、例えば「好きなおみそ汁の具」を紹介したりすることで、その人の趣味・嗜好がわかり、打ち解けやすくなります。



会場設営

参加者全員で、会場を設営することも、アイスブレイクの一種です。一緒に体を動かすことで、自然と緊張が和らぎます。



05 避難所運営ゲーム北海道版（Doはぐ）

★避難所運営をみんなで考える。

概要

避難所運営ゲーム（HUG）は、避難所運営をみんなで考えるためのひとつのアプローチとして、静岡県が開発したものですが、道では、平成28年に北海道の積雪・寒冷の観点や東日本大震災の教訓などを盛り込んだ「避難所運営ゲーム（HUG）北海道版～Doはぐ～」を作成しました。避難者の年齢や性別、国籍、それぞれが抱える事情が書かれたカードを、避難所の体育館や教室に見立てた平面図にどれだけ適切に配置できるか、また避難所で起こるさまざまな出来事にどう対応していくかを模擬体験するゲームです。



ねらい

避難所運営について複数の人で話し合いながら考えることで、運営の課題や避難所開設にあたって必要となる準備に気づき、事前の備えの重要性を学ぶことをねらいとしています。

対象

地域住民（町内会・自主防災組織）、施設管理者、市町村職員など、災害発生時に避難所運営に携わる可能性のある方

効果

机上の計画では気づかない問題点が見つかる、参加者の連帯感が生まれるなど、現場の実態に合った避難所運営を検討するきっかけとなります。

進め方

●人数：1グループ6人以内（読み上げ係を除く）　●時間：3時間程度

① 事前準備

会議机３脚などで1グループ分のスペースを作ります。1グループは、読み上げ係を除いて6人以下のプレーヤーで行うことを推奨します。ゲームスペースに、「体育館」、「敷地図」、「間取図」、「教室」の用紙を置きます。

② 講師がゲームの設定条件を説明する

避難当日の設定条件（震度、気象条件、季節、時間、被災状況、避難者の様子）を説明します。

③ 自己紹介をする

「アイスブレイキングシート（簡単自己紹介）」用紙を使ってグループの中で自己紹介をします。

④ ゲーム開始

カードを順番に読み上げてからスペースに出し、参加者はこのカードを体育館にどのように配置するかを相談します。カード情報をグループ内に周知することで参加者全員が危機感を持って対応にあたります。カードの中には、イベントカードが入っています。イベントカードに書かれた内容をプレーヤーみんなで相談します。

★進行のポイント：ゲーム本番以後、次々とカードを読み上げます。

迅速な避難対応を疑似体験するため、カードを読み上げるときは参加者が前のカードを配置し終わる前に次のカードを読み上げるのがコツです。実際の災害のとき、避難者は待ってくれません。カードを全て配置したら、ゲーム終了です。

⑤ まとめ

ゲーム終了後には、意見交換の時間を設けます（基本は30分程度です）。
用意したメモ用紙（付箋紙）を全員に配布し、次のような質問を記入します。

例）「私たちのグループでは、盲導犬は人と同じように扱うべきだと思ったので、家族と一緒に１年２組に入ってもらいました。他のグループでは、どうしましたか？」

記入したメモ用紙（付箋紙）をグループでまとめ、1つ選んで発表してもらいます。その質問に対して、ほかのグループから意見を求めます。これを何回か繰り返して、ほかのグループとの比較検討をします。

準備するもの

- ☑Doはぐセット（道より貸出）
- ☑ マーカー
- ☑ 筆記用具
- ☑ メモ用紙
- ☑ 付箋紙



Doはぐセット

貸出方法などは
北海道総務部危機対策局危機対策課
（電話011－204－5900）
までお問い合わせください。

平成30年北海道胆振東部地震における災害検証において、実際の避難所運営に活用できるようとの提言を受け、急性期の避難所において、段ボールベッドを早期に導入することが避難所の生活環境の改善につながることから、導入に関する資料を追加するとともに、解説書に必要な修正を行いました。

ポイント

地域で実施する場合は、できるだけ実際に使う避難所の敷地図、間取図を用意しましょう。
ゲーム終了後に、地域の避難所運営について考える機会を設けると良いでしょう。

06, 避難所体験・運営訓練

★避難所生活や運営を体験する。



ねらい 訓練を通じて避難所生活を実体験するほか、災害時における避難所生活や運営のイメージを参加者で共有します。

対象 地域住民（町内会・自主防災組織など）

効果 避難所生活の大変さを理解するとともに、避難所の開設・運営における地域住民の役割や事前の準備・対策上の理解が深まります。

概要 災害発生時に避難所となる学校の体育館などで、寝るためのスペース確保や炊き出しなど、避難所生活や避難所運営を体験する訓練です。

避難所体験・運営訓練のメニュー例

訓練時間によって、メニューを組み合わせて実施します。

- **避難訓練**
  会場となる避難所まで、避難訓練を行います。
- **避難所設営訓練（テント・仮設トイレ設営）**
  体育館の中に間仕切りを設置したり、グラウンドに避難用テントを設営します。また、仮設トイレの設営やストーブの組み立てを行います。
- **避難者受け入れ訓練**
  避難者名簿の作成、避難者数の集計などを行います。
- **救出・救護訓練**
  AEDの使い方をはじめ救急救命の学習や、建物などの倒壊で挟まれた人の救助訓練をし、担架で搬送します。
- **避難食づくり体験、炊き出し訓練**
  非常食（アルファ米、レトルト食品など）と水、燃料を配布し、食事をとります。あるいは、地域の食材などを利用して炊き出しを実施します。
- **避難所生活体験（宿泊体験）**
  避難所に備蓄されているマット・寝具や寝袋などを用いて、避難所で一晩を過ごします。
- **避難所運営ゲーム（HUG）などの実施**
  【防災教育の多様なメニュー▶P14・19】
  避難所運営ゲーム（HUG）や災害図上訓練（DIG）を実施し、避難所運営や避難にあたっての課題を共有します。









実施事例

・時期：冬季に災害が発生し、水道、電気、暖房などが停止した場合を想定。
・訓練時間は半日または１日（宿泊含む）

時刻	訓練項目
13:00	訓練開始・内容説明
13:15	避難所設営訓練
	（ストーブの設置）
14:00	座学 ①
15:30	体操など
16:00	炊き出し準備
16:30	座学 ②
17:00	炊き出し訓練
18:00	避難所設営訓練
	（簡易トイレの作成など）
19:00	災害図上訓練（DIG）
21:00	宿泊体験準備
22:00	宿泊体験
6:00	訓練終了

※旭川市避難所訓練事例より
（平成 26 年 1 月 18・19 日開催）P44

ポイント
・この訓練の前後に、地域における避難所の開設・運営のルールや役割分担を話し合うとより効果的です。
・複数の避難所を利用し、さまざまな状況を想定した訓練を実施することもあります。
・毛布や寝袋などの数を参加者数より少なくし、救援物資が不足する可能性があることを理解する方法もあります。

避難所運営での感染症対策



避難所では、衛生状態の悪化や長期化する避難生活でのストレスなどによる避難者の体力・抵抗力の低下から、感染症が発生しやすい環境にあります。感染拡大防止に万全を期すため、次の点に留意する必要があります。

避難者等の健康管理



○ 避難者及び運営スタッフの健康状態の確認

- 避難者の健康状態（発熱、咳、発疹、傷、嘔吐、下痢など）を避難所への到着時に確認するとともに、避難生活開始後も、定期的に確認する必要があります。
- 保健師による巡回のほか、避難者一人ひとりによる健康チェックが重要です。
- 運営スタッフは、事前に各自の健康状態を確認し、症状がある場合は避難所運営組織に速やかに報告するとともに、症状が改善するまで健康状態に問題のないスタッフと交代するなどの対応が必要です。

避難所の衛生管理





○ 手洗い、咳エチケット等の基本的な対策の徹底

- 避難者や運営スタッフは、頻繁に手洗いや咳エチケット等の基本的な感染症対策を徹底します。

○ 避難所の衛生環境の確保

- 物品等は、定期的に、また目に見える汚れがあるときは、家庭用洗剤を用いて清掃するなど、衛生環境を保ちます。
- トイレは定期的に清掃と消毒を行います。清掃する際は、マスクと使い捨て手袋、エプロンを用意し、次亜塩素酸ナトリウム（家庭用塩素系漂白剤など）を用いて、便器周りを中心に清掃します。
- 消毒薬は、感染源に対し、効果が裏付けされているものを使用することが重要です。（例：アルコールはインフルエンザやコロナウィルスに有効ですが、ノロウィルスには効果がありません。）
- 避難所は土足厳禁にします。
- 紙オムツ等の廃棄のため、蓋付きの専用ゴミ箱を設置します。

○ 十分な換気の実施、スペースの確保等

- 避難所内は、定期的に十分な換気を行います。
- 避難者が十分なスペースを確保できるよう留意し、人との間隔は、できるだけ2m（最低1m）空けることが望ましく、カーテンや段ボール等によるパーティションも有効です。

発症時等の対応



○ 避難者が感染症を発症又はその疑いがある場合

- 感染症を発症した場合等の対応については、患者の隔離や病院への搬送など保健福祉部局と十分に連携の上で、適切な対応を事前に検討する必要があります。

○ 発熱、咳等の症状が出た者のための専用のスペースの確保

- 発熱、咳等の症状が出た者が発生した場合は、専用のスペースを確保することが必要です。その際、スペースは可能な限り個室にするとともに、専用のトイレと手洗い場を確保します。
- 発熱や咳等のある人々を同室にすることは、望ましくありません。やむを得ず同室にする場合は、パーティションで区切るなどの工夫をすることが必要です。
- 症状が出た者の専用のスペース、トイレや手洗い場は、一般の避難者とはゾーン、動線を分けます。
なお、すぐに対応ができない場合は、取っ手やノブなどの共用部分の消毒を徹底する必要があります。

ほっかいどうの防災教育
Do Bow Sai
どぅー　ぼうさい

北海道では、防災教育に係る知識の向上や意識の啓発を図るツールとしてYouTubeを活用した動画を配信しておりますので、避難所運営における感染症対策等にご活用ください。



北海道版避難所マニュアル

道では、平成28年7月に市町村の取組の一助となるよう避難所運営等の基本的な手順をひな形として示した「北海道版避難所マニュアル」を作成しました。その後、平成30年の北海道胆振東部地震検証委員会からの提言や厳冬期における避難所運営訓練の結果、新型コロナウイルスを含む感染症対策を加え、令和2年5月に改正しました。

また、上記改正を踏まえた検証結果については、こちらです。

感染症対策検証結果
（恵庭市　令和２年６月）



厳冬期における避難所環境検証結果
（恵庭市　令和3年1月）



※QRコードは㈱デンソーウェーブの登録商標です

避難所体験や運営訓練に合わせて体験してみましょう

避難食づくり体験

災害時に貴重な水を節約できる炊き出し方法を身に付けることができます。
ポリ袋を使うことにより、誰でも簡単に非常用の炊き出しご飯を作れます（高密度ポリエチレン製のものを使うと、より効率的に炊き出しができます）。
一度に大量の炊飯ができる上、炊飯道具や茶碗などを準備する必要がないので災害時に便利です。

包装食袋
（高密度ポリエチレン製）

耐久性、耐寒性、耐薬品性に優れた素材を使ったポリ袋で、非常食用の炊き出し袋として商品化されています。インターネットによる通信販売などで購入できます。



お米の炊き方

所要時間　50～60分

材料
- □ お米（無洗米）半合（90cc）
- □ 炊飯袋（高密度ポリエチレン製）1枚
- □ 水 110～120cc



作り方
1. 炊飯袋に米と水を入れ、袋の中の空気を抜いて、上端部を5センチほど折って、輪ゴムでしっかり留める。
2. 炊飯袋を沸騰した湯に入れて20～30分間加熱する。
3. 湯から取り出して、10～20分間蒸らす。
4. 袋の下端部の切れ目から開ける。または上部をはさみで切ってご飯を取り出して、出来上がり。

ワンポイント　お米と一緒に塩昆布や山菜などを入れると炊き込みご飯のようになります。また、お米を炊く時にレトルトカレーも一緒に温めると、カレーライスになります。

新聞紙スリッパ作り

地震などの災害発生時、室内に窓ガラスが割れ散乱するなど危険な状況の際、身近な物である新聞紙を使用しスリッパを作ることで身を守ることができます。作成は容易であり、とても便利な上、体験を通じて楽しみながら防災の知恵を学べます。

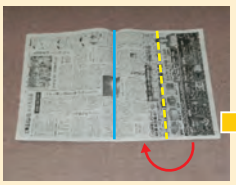
所要時間　5分程度

材料
- □ 新聞紙



作り方

1. 
開いた新聞紙を半分に折ります。
*さらに半分に折ると子供用になります。


2. 
真ん中に向かって、右→左に1回折る。


3. 
もう1回、右→左に1回折る。


4. 

折り重なっている方が上にくるように裏返す。


5. 
3等分になるよう右→左に2回折る。


6. 
どちらかを、反対側の正方形に入れ込む。


7. 
正方形を内側に折り込む。


8. 
裏返して完成!

07, 災害対応ゲーム クロスロード

★ジレンマを体験する。～ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション～



ねらい 重大な判断を伴う災害対応を自らの問題として考え、またさまざまな意見や価値観を参加者同士で共有することをねらいとしています。

対象 市町村職員、地域住民（町内会・自主防災組織）、災害ボランティアなど

効果 多様な立場の参加者から意見を聞くことにより、自分とは異なる考えや価値観の存在への気づきが得られます。また、重要な問題に関して事前に合意を形成しておくことの必要性に気づくことができます。

概要 災害時にはさまざまな事象に遭遇します。目の前で危険なことや困ったことを見たとき、あなたは「二者択一では決められない」選択を強いられます。災害対応ゲーム『クロスロード』では、「イエス」「ノー」の分岐点（クロスロード）を体験することにより、リスク・コミュニケーションを学びます。

※キットを人数分購入して使用してください。

進め方

●人数／1グループ　5人または7人を基本とする
●時間／全体で約90分（ルールの説明10分
ゲームの実施50分 ふりかえり30分）

❶ 事前準備

① 対象人数とグループ数

1グループの人数は5人を基本とします（6人、ないし7人で実施も可能。ただし、ルール上奇数が好ましい）。

② 会場準備

グループで話し合いのできる机と椅子が必要になります。グループ同士は、それぞれの話し合いの声が邪魔にならない程度に離します。

❷ クロスロードの実施

ゲームは、問題カードとイエスカード・ノーカード各1枚ずつを使って行います。プレーヤーは1人ずつ順番に問題カードを読み上げます。カードが読み上げられるごとに、プレーヤー全員が読み上げられたカードの内容について、自分の意見がイエスか、ノーかを考えます。自分の意見がイエスならイエスカードを、ノーならノーカードの裏を上にして、自分の前に置きます。グループの全員がカードを置いたら、一斉にカードを表に向けます。表向きになったカードを確認して、多数派のプレーヤーが得点を表す青い座布団を手に入れることができます。問題カードを全て読み終えた時点で、最も多くの座布団を持っている人が「勝ち」となります。



クロスロード（Crossroad）は、阪神・淡路大震災で、災害対応にあたった神戸市職員へのインタビューをもとに作成された、カードゲーム形式の防災教材です。また、文部科学省大都市大震災軽減化特別プロジェクト（林春男研究グループ）の成果によるものです。

準備するもの

- ☑「クロスロード（神戸編・一般編）」
- ☑「クロスロード（市民編）」
- ☑「クロスロード（災害ボランティア編）」

「クロスロード」は、登録商標（商願2004-083439、および、商願2004-083440）です。不許複製。
制作・著作は、Team Crossroad チームクロスロード（網代剛、矢守克也、吉川肇子：50音順）です。
販売についてのお問い合わせは、「京都大学生協ブックセンター」（電話：075-771-7336）まで

＊参考書籍の紹介＊

「防災ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション－クロスロードへの招待」

発行：ナカニシヤ出版
著者：矢守克也
　　吉川肇子
　　網代剛



リスク・コミュニケーションや防災ゲームの基礎についても、わかりやすく解説されています。

「クロスロード・ネクスト～続：ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション」も発行されています。

●参考サイト　クロスロード　https://maechan.net/crossroad/

08 防災運動会

★町内会・学校・職場の仲間みんなで、楽しく実践を通して防災を学ぶ。



概要

災害時に実際に役立つ知恵や工夫を競技形式にアレンジし、チームごとに競い合う運動会です。
防災に役立つ種目を集めた「防災運動会」として実施したり、学校や地域の運動会に何種類かの競技を盛り込んだりすることもできます。
留萌市では、平成24年度から防災を考えるネットワーク（萌志会（留萌建設協会二世会）事務局）が主催し防災運動会を実施しています。市内の町内会や高校生・企業など市民がチームで参加しています。

ねらい

子どもからお年寄りまでの幅広い対象が、災害発生時に地域で協力しあいながら実践できることを楽しく学びます。講義など、防災研修の参加経験が少ない住民も楽しく参加できるほか、地域の「共助」の意識を育みます。

対象

地域住民（町内会・自主防災組織・学校など）、そのほかさまざまな団体（企業・サークルなど）

効果

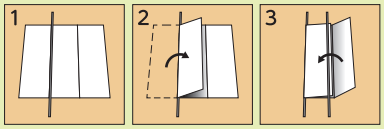
実際の災害発生時に、身に付いたノウハウを活用して、被害軽減や救助活動が可能となります。
また準備や運営を通じて、地域の協力体制（共助の意識）が構築されます。

競技例

担架運びリレー

- **競技内容**：災害時にけが人が発生した場合を想定し、毛布と物干しざおで簡易担架を作成、けが人を素早く安全に搬送するリレー。
- **学べること**：簡易担架の作成方法、搬送時の重みや安全に運ぶことの困難さ、チーム連携の大切さ。

＜ 簡易担架作成方法 ＞





1. ステンレス物干しざお2本と毛布1枚を用意する。
2. 広げた毛布の3分の1のところに物干しざおを置き、それを包むように毛布を折る。
3. 折り返した毛布の端にもう一本の物干しざおを置き、それを包むように残りの毛布を折り返す。

土のう積み競争

- **競技内容**：浸水や土砂の侵入を防ぐことを想定し、チームで土のうを作り積み上げ時間と完成度を競う。
- **学べること**：土のう作成方法と積み方、チーム連携の大切さ。

＜ 土のう作成方法 ＞

1. 土のう袋にはスコップ5杯分を目安に土を入れる。
3. 作成した土のう袋は一輪車を使って所定の位置まで運ぶ。
2. 運んだ土のう袋を3列で7段積み上げる。



バケツリレー

- **競技内容**：火災や水害の発生を想定し、バケツで水（またはテニスボールなど）をこぼさずに運ぶリレー。
- **学べること**：災害時の地域における初期対処方法、すばやく確実に運ぶことの困難さ、チーム連携の大切さ。

＜ バケツリレーのルール ＞

・1チーム3個のバケツを使用する。
・バケツの受け渡しは、隣の人へ手渡しで行い、バケツを持って走らない。
・より速くゴール地点のポリバケツを満杯にした方が勝者となる。



防災クイズ

- **競技内容**：有事の際の行動についてクイズに答える。
- **学べること**：防災についての正しい知識。

＜ 防災クイズの例 ＞

あなたが家にいるとき大地震が起きました。最初にとる行動で正しいのは次のうちどれでしょう?

①ガスの元栓を閉める　②ドアや窓を開ける　③机の下に隠れる

正解：③

目隠し距離当てゲーム

- **競技内容**：災害時の停電などを想定し、目隠しをした状態で両手をつき、指定された距離を感覚で移動するゲーム。実際の距離との差を競う。
- **学べること**：暗闇の中での歩行や距離感を持つことの難しさ。

このほかにも、防災借り物競争や非常食準備競争、大声コンテストなど、さまざまな競技を工夫して行ってみましょう。

●参考サイト　萌志会（留萌建設協会二世会）　http://www.houshi-kai.com/

09, シェイクアウト



概要

シェイクアウト（Shake Out）は、平成20年(2008年)にアメリカのカリフォルニア州で始まった新しい形の訓練です。
あらかじめ指定した地震発生（訓練）日時に、参加者がそれぞれの場所で自分の身を守るための1分間の安全確保行動 1-2-3（Drop ～まず低く、Cover ～頭を守り、Hold On ～動かない）を一斉に行います。
日本では、日本シェイクアウト提唱会議が、全国に参加を呼びかけています。

北海道シェイクアウト

北海道では、全国の都道府県で最も早い平成24年度から参加しております。道内各地の幼稚園、学校、関係機関など総勢12万人を越える参加者が、当日10時に一斉にシェイクアウトを行いました。終了後は、それぞれの参加団体の中で避難訓練や研修会を行うなど、プラスワンの活動につなげます。
シェイクアウトは、事前にホームページで参加登録をして実施します。

●参考サイト
シェイクアウト　http://www.shakeout.jp/

10, 幼児向け防災教育用カードゲーム「ぼうさいダック」



概要

「ぼうさいダック」は、一般社団法人 日本損害保険協会が平成17年(2005年)に防災教育活動の一環として制作した幼児向けのカードゲームです。
先生などの進行役が、災害のイラストが描かれたカードの表面を提示し、子どもたちがそれに応じて素早くカードの裏面に記されている対応行動のポーズをとります。
イベントや幼稚園、高齢者施設などで実施されています。

ねらい

子どもたちが実際に体を動かし、声を出して遊びながら、安全・安心への「第一歩」を自然と身に付けることができます。防災や日常の危険から身を守ることに加え、あいさつやマナーといった生活の習慣についても学ぶことができます。

対象

幼児から小学校低学年の児童、高齢者など

●参考サイト
一般社団法人 日本損害保険協会
https://www.sonpo.or.jp/about/efforts/reduction/bousai-duck/index.html

11, e-ラーニング



概要

e-ラーニングはインターネットを活用した学習形態で、いつでも誰でもどこからでも利用することができます。
例えば、総務省消防庁では大規模な災害に対して、地域の防災力を強化するため「防災・危機管理 eカレッジ」を実施しており、子どもから一般・消防団員など幅広い対象に学びの場を提供しています。

ねらい

インターネットを利用して、さまざまな防災に関することを学び、地域の防災力を高めて被害の軽減を図ることをねらいとしています。

対象

地域住民、消防職員・消防団員、市町村職員など

●参考サイト
e-カレッジへようこそ！総務省消防庁
https://open.fdma.go.jp/e-college/

12, 北海Do防災かるた





概要 「北海Do防災かるた」は、平成29年3月にほっかいどう防災教育協働ネットワークの協働プロジェクトとして完成しました。北海道の子どもたちが、かるた遊びを通じ、楽しみながら北海道ならではの防災知識を学べる教材です。

ねらい 年齢に関係なく、誰でも楽しめる「かるた遊び」を通じて北海道ならではの自然災害リスクや防災に関する知識が身につきます

対象 幼児から小・中学生、高齢者など

●問い合わせ
（一財）日本気象協会北海道支社
電話：011-622-2230

13, まさかは必ずやってくる啓発リーフレット



概要 北海道では、災害時にとるべき行動について、ポイントを分かりやすくまとめた啓発マンガリーフレットを作成しました。
※各英語版もあり

ねらい 年齢に関係なく、マンガを通じて、各災害へのとるべき行動について分かりやすく把握できます。

対象 幼児から小・中学生、地域住民など

●参考サイト
北海道危機対策局危機対策課
https://www.pref.hokkaido/sm/ktk/masaka.html

14, まさかは必ずやってくる災害映像集



概要 北海道では、令和2年3月に防災に関する授業や住民学習会等の場において活用ができるよう、北海道・日本全国の災害映像集（地震編・津波編・大雨洪水編・火山噴火編）を作成しました。
各市町村、各（総合）振興局で貸出が可能です。

ねらい 北海道・日本全国の災害映像を防災に関する授業や住民学習会等の場において活用することで、実際の災害状況の理解等を深めることができます。

対象 学生、地域住民、市町村職員など

●問い合わせ
北海道危機対策局危機対策課
電話：011-206-7804

15, 北の災害食レシピ



概要 北海道では、「厳しい冬の北海道で災害が起きたときに、食の宝庫北海道だからこそできる防災対策を。」をコンセプトに、北の災害食レシピコンテストを開催し、レシピ集を作成しました。

ねらい 厳しい冬の避難生活でも健康に過ごすことができる、災害食レシピを分かりやすく把握できます。

対象 学生、地域住民、市町村職員など

●参考サイト
ほっかいどうの防災教育
https://kyouiku.bousai-hokkaido.jp

ここで紹介した01～15のほかにも、さまざまな防災教育のメニューがありますので、目的と対象に合ったメニューを探してみてください。

3 防災教育モデルカリキュラム

道内市町村や消防本部、自主防災組織、町内会などへのアンケート調査によると、防災教育に取り組むにあたって、参考となる教材やカリキュラム、先進的な取り組み事例を知りたいというニーズがあることがわかりました。

このため、道では平成25年度に全道6カ所で防災教育のモデル講座を実施し、その効果の検証を行いながら防災教育モデルカリキュラムを作成しました。

このカリキュラムは、P12 ～ P26で紹介した防災教育のさまざまなメニューを組み合わせながら作成したものです。それぞれのカリキュラムのページには、道が実施したモデル講座の様子を掲載しました。

◆ モデル講座の概要とアンケート結果については、以下のウェブサイトから見ることができます。
ほっかいどうの防災教育・・・・・・・http://www.pref.hokkaido.lg.jp/sm/ktk/bousaikyouiku.htm

防災教育の進め方には、さまざまな手法があります。

このカリキュラムはあくまで参考例としてお使いいただき、ぜひ、みなさんの地域の特性や災害の特徴などを踏まえて、オリジナルのカリキュラムを作成してみてください。

なお、道内各地で進められているさまざまな担い手や対象、手法による実践事例をP41 ～ P46に紹介しています。具体的な進め方や講師選定の参考としてください。

モデルカリキュラム	道が実施したモデル講座
防災教育モデルカリキュラム1 ▶ P28 **住民を対象とした まちあるきによる防災研修会**	**『防災まちあるきとご当地避難食づくり』** ○開催日時／平成25年10月19日(土)9:00～13:00 ○開催場所／留萌中学校(留萌市) ○対　　象／地域住民(町内会)
防災教育モデルカリキュラム2 ▶ P29 **住民を対象とした 地域の防災を考える研修会**	**『避難所運営ゲーム(HUG)』** ○開催日時／平成25年10月15日(火)13:00～16:00 ○開催場所／浦幌町中央公民館(浦幌町) ○対　　象／地域住民
防災教育モデルカリキュラム3 ▶ P30 **市町村防災担当職員・消防団員・ 地域防災リーダーを対象とした防災力向上研修会**	**『地域防災リーダーの防災力向上研修会』** ○開催日時／平成25年10月12日(土)11:00～17:00 ○開催場所／まなみーる(岩見沢市) ○対　　象／市町村防災担当職員・消防団員・地域住民(自主防災組織)
防災教育モデルカリキュラム4 ▶ P31 **市町村防災担当職員・消防職員を 対象とした防災教育企画研修会**	**『防災教育の企画・運営スキル向上研修会』** ○開催日時／平成25年11月19日(火)10:00～16:00 11月20日(水)10:00～15:45 ○開催場所／本の森厚岸情報館(厚岸町) ○対　　象／市町村防災担当職員・消防職員
防災教育モデルカリキュラム5 ▶ P32 **観光地の災害対応力強化に 向けた防災研修会**	**『函館観光の津波防災を考える勉強会』** ○開催日時／平成25年10月9日(水)14:00～17:00 ○開催場所／ペルラ(函館市) ○対　　象／函館市内の観光関係事業者・市町村職員など
防災教育モデルカリキュラム6 ▶ P33 **住民を対象とした 集客施設での防災啓発イベント**	**『親子で参加! 防災学ぶランド』** ○開催日時／平成25年9月29日(日)11:00～15:00 ○開催場所／イオン釧路昭和店(釧路市) ○対　　象／地域住民

住民を対象としたまちあるきによる防災研修会

●ねらい／災害は誰にでも起こりうることを理解し、防災への興味・関心を促す。地域の自主防災組織や防災活動団体などが一緒に活動し、顔の見える関係をつくる。まちあるきや炊き出しなどの体験活動を通じ、災害時の個人や地域の役割について理解を深める。
●受講対象／地域住民（町内会・自主防災組織・学校など）



タイムスケジュール

9:00	開会	
9:05	導入25分	メニュー① ▶P13
	講義　『災害と避難を学ぶ』	
	説明　『まちあるきの方法』	
	役割決め:写真係・記録係	
9:30	実践20分	メニュー④ ▶P18
	室内避難を体験しよう	
9:50	実践10分	メニュー⑥ ▶P21
	避難食を作ってみよう	
10:00	実践60分	メニュー③ ▶P17
	防災まちあるきにでかけよう	
11:00	実践45分	
	防災マップをつくろう(発表&講評)	
11:45	実践15分	メニュー⑥ ▶P20
	新聞紙スリッパ作り	
12:00	ご当地避難食の試食	
	(炊飯袋を使ったご飯&タコカレー)	
12:30	実践25分	メニュー⑧ ▶P24
	楽しく学ぶ防災〜ミニ防災運動会	
	簡易担架づくり・防災クイズ	
12:55	ふりかえりアンケート	
13:00	閉会	

モデル講座参加者の声

●ふだん何気なく見ている地域も、意識して歩くといろいろなものを発見することができました。
●座学だけでなく、動いて学ぶことが一番ためになると思いました。

★ 内容例（道が実施したモデル講座から）

講義『災害と避難を学ぶ』
過去に発生した災害や避難経験、想定される災害について学びました。



実践『室内避難を体験しよう』
夜間に災害が発生した際に、速やかな避難が困難なことを実感できるよう室内避難体験を行いました。



実践『避難食をつくってみよう』
高密度ポリエチレンの炊飯袋を使って、避難食づくりを体験しました。



実践『防災まちあるき』
グループごとにまちあるきを行い、避難経路や危険箇所などをチェックしました。



実践『防災マップ作成』
まちあるきで確認した内容をもとに防災マップを作成し、地域の特徴を全員で確認しました。



実践『ほのぼの灯かりづくり体験』
身近にある空瓶や食用油を利用した簡単な灯かりづくりを体験しました。



ワンポイントアドバイス

●研修受講者の積極性を高めるためには、講座の早い段階で受講者が興味・関心を引く内容を取り入れると効果的です。
●昼食時に避難食づくり・試食の体験をすることも良いでしょう。

住民を対象とした地域の防災を考える研修会

●ねらい／災害発生時に、地域住民が互いに協力して助け合うことの重要性について理解を深める。参加者が避難所運営を一緒に考えることで、日ごろの備えについて自主防災組織・学校などの地域で考えるきっかけとする。
●受講対象／地域住民（町内会・自主防災組織・学校など）



タイムスケジュール

13:00	開会	
13:05	導入10分	メニュー① ▶P13
	『避難所運営とは』	
13:15	説明15分	
	『避難所運営ゲーム（HUG）』	
13:30	説明10分	
	自己紹介・役割決め	
13:40	開設準備20分	
	災害状況のイメージトレーニング	
	開設準備	
14:00	実践①20分	メニュー⑤ ▶P19
	『避難所運営ゲーム（HUG）』	
14:20	休憩	
14:30	実践②20分	メニュー⑤ ▶P19
	『避難所運営ゲーム（HUG）』	
14:50	グループディスカッション30分	
	『グループディスカッション』	
15:20	発表および講評	
15:50	ふりかえりアンケート	
16:00	閉会	



モデル講座参加者の声

●少人数でも考え方や意見が違うことを改めて感じ、スムーズな避難所運営の大変さに気づかされました。

★ 内容例（道が実施したモデル講座から）

講義『避難所運営とは』

避難所について考える必要性や、避難所の運営とはどのようなことかなどについて学びました。



災害状況のイメージトレーニング・開設準備

沿岸部から避難所にどんな人が逃げてくるのかを具体的に想像し、どのような対応をしたら良いか検討しました。避難所の受付、入り口、使用して良い場所、立ち入り禁止の場所、駐車場などの図面への書き込み、避難所の開設についてイメージトレーニングしました。



実践『避難所運営ゲーム（HUG）』

とかち防災マスターネットワークに所属する地域防災マスターが読み上げるカードにしたがって、避難所運営を考えました。



グループディスカッション

ゲーム終了後、参加者同士で避難所運営のルールや課題、事前に備えておくべきことなどについてグループディスカッションを行いました。



ワンポイントアドバイス

●HUG（避難所運営ゲーム）を実施する際は、具体的なイメージがわくように、実際に避難所となる場所で開催したり、仮設トイレや段ボールの避難所用間仕切りなどの展示があると効果的です。避難所となる施設で講座を開催する場合には、当日参加者で施設を見学し、状況を把握してから実施するとさらに効果的です。

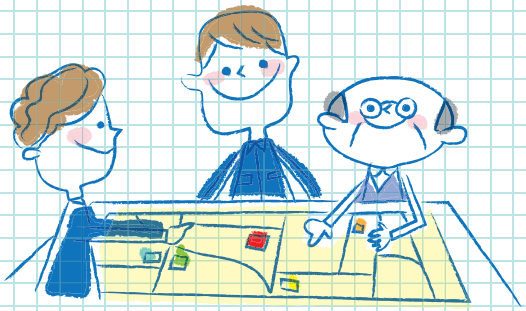
市町村防災担当職員・消防団員などを対象とした防災力向上研修会

●ねらい／道内の自然災害の状況や地域特有の気象および災害の特性を理解する。地域の防災リーダーとして、防災教育を推進する重要性について理解を深め、担い手として必要なスキルを身につける。市町村職員と消防団員などとの平常時からの連携を強化する。
●受講対象／市町村防災担当職員、消防団員、地域防災リーダー



タイムスケジュール

10:00	開会
10:10	講義50分 メニュー① ▶P13
	『北海道の自然災害とその対応』
11:00	講義60分
	『地域の防災リーダーになるためには』
12:00	休憩
13:00	実践60分 コラム ▶P16
	『状況予測型図上訓練』
14:00	休憩
14:15	実践120分 メニュー② ▶P14
	『災害図上訓練(DIG)』
16:15	講師による講評・質疑応答
16:45	ふりかえりアンケート
17:00	閉会



モデル講座参加者の声

●職場で避難経路について確認をしたり、家族で災害時の連絡方法について確認しました。
●自主防災組織でDIGを実施し、地域内の危険な箇所を洗い出したいと思いました。

★ 内容例（道が実施したモデル講座から）

講義『北海道の自然災害とその対応』

北海道の自然災害の状況や、地域の気象特性と備えについて理解を深めるため、気象台職員による講義を行いました。



講義『地域の防災リーダーになるためには』

地域の防災リーダーの役割や重要性、地域における防災研修の進め方などのノウハウについて理解を深めるため、北海道消防学校講師による講義を行いました。



実践『状況予測型図上訓練』

顔の見える関係づくりをねらいとして、消防団員と市町村職員が混合でグループをつくり、イメージトレーニングと意見交換を行いました。



実践『災害図上訓練(DIG)』

地域の地図を囲んで道路や避難場所の位置などを確認した後、さまざまな災害や被害を想定し、その対応について意見交換を行いました。



ワンポイントアドバイス

●DIGを実施する際は、受講者に地域特性を知ってもらうことが大切なので、研修会の冒頭で気象台職員などの専門家による講義を組み込むと、より効果が高まるでしょう。
●DIGで使用する地図は、災害種別や参加者に適応した縮尺や大きさのものを使用しましょう。

市町村防災担当職員・消防職員を対象とした防災教育企画研修会

●ねらい／地域住民を対象とした防災教育を推進するため、「クロスロード」など、多様な手法による研修方式について、実践を通じて理解を深め、企画・運営に必要な専門的スキルを身に付ける。市町村職員と消防職員との平常時からの連携を強化する。
●受講対象／市町村防災担当職員、消防職員



タイムスケジュール

■1日目プログラム

10:00	開会	
10:10	講義40分	メニュー① ▶P13
	『防災教育を実践するために』	
10:50	休憩	
11:00	講義10分	
	『災害対応ゲーム「クロスロード」の概要について』	
11:10	自己紹介、「クロスロード」の練習問題の実践	
11:30	休憩	
12:30	実践180分	メニュー⑦ ▶P23
	『災害対応ゲーム「クロスロード」』	
15:30	講師による講評、質疑応答	
15:50	ふりかえりアンケート	
16:00	閉会	

■2日目プログラム

10:00	開会	
10:05	実践115分	コラム ▶P16
	『状況予測型図上訓練』	
12:00	休憩	
13:00	実践120分	メニュー② ▶P14
	『災害図上訓練（DIG）』	
15:00	地元での実施に向けて	
15:30	講師による講評・質疑応答	
15:40	ふりかえりアンケート	
15:45	閉会	

★ 内容例（道が実施したモデル講座から）

講義『防災教育を実践するために』

市町村防災担当職員などが、地域の住民と共に防災教育を実践するための考え方について学びました。



実践 災害対応ゲーム「クロスロード」

ゲームを通して、災害対応の場面では「正解」のない問題に数多く直面すること、多様な背景や考え方を持つ人達とその時その場での「答え」を見出すことの大切さを学びました。



実践『状況予測型図上訓練』

市町村防災担当職員などが地域住民に対して状況予測型図上訓練を行えるように、実施方法を学びました。



実践『災害図上訓練（DIG）』

市町村防災担当職員などが地域住民に対して災害図上訓練（DIG）を実施できるように、その方法を学びました。



モデル講座参加者の声

●クロスロードは、小学生から高齢者まで防災に関心を持ってもらう、いいゲームだと思いました。
●児童を対象とした防災教育を行い、その町の未来のキーパーソンを育てることが重要だと感じました。

ワンポイントアドバイス

●グループワークをする場合には、グループ同士のそれぞれの話し合いの声が邪魔にならない程度に机を離したり、講師などが会場内を歩きやすいように、広めの会場を確保すると良いでしょう。

観光地の災害対応力強化に向けた防災研修会

●ねらい／観光地における観光協会、観光関係事業者、商工会、市町村職員の防災意識の向上を図る。災害発生時に観光客を安全かつ確実に避難させるための備えを再認識し、連携の強化を図る。
●受講対象／地域の観光関係事業者、市町村職員



タイムスケジュール

14:00	開会
14:10	導入20分 メニュー① ▶P13 『観光事業者としての日ごろの備え』
14:30	講演60分 メニュー① ▶P13 『観光地における危機管理』
15:30	休憩
15:40	実践70分 メニュー② ▶P14 『観光地のための災害図上訓練(DIG)』
16:50	ふりかえりアンケート
17:00	閉会



★ 内容例（道が実施したモデル講座から）

導入『観光事業者としての日ごろの備え』

災害発生時に、観光事業者が観光客を安全に避難・誘導するための備えとして、観光地の特徴を踏まえたマニュアルを作成、活用方法と観光事業者としての日ごろの備えを学びました。



講演『観光地における危機管理』

観光地の防災対策に先進的に取り組んでいる本州の観光事業者を招き、観光客に安全で安心な旅を提供するための取り組み事例として、「観光地における危機管理」についての講演を実施、観光地がとるべき備えについて学びました。



実践『観光地のための災害図上訓練（DIG）』

地域の地図を見ながら、避難路や避難場所、誘導方法などについて図上訓練をした後、関係者で課題を整理し、対策を検討しました。訓練を通して、災害が発生した場合に、観光客を守るための備えについて学びました。



モデル講座参加者の声

●先進的に取り組んでいる方の講演を聞いて、事前の防災対策をしておくことが重要だと感じました。
●地元の関係者で地図を囲んで行った災害図上訓練（DIG）は非常にためになりました。

ワンポイントアドバイス

●観光事業者を対象とした研修を企画する際には、参加者の経営形態を考慮し、参加しやすい時間帯や長時間の拘束とならないような時間設定にしましょう。

住民を対象とした集客施設での防災啓発イベント

●ねらい／親子で楽しく防災について考えるきっかけをつくる。地域の災害に対する知識・関心を深め、日ごろの備えの大切さについて気づきを促す。親や子ども同士で話題となることを期待し、防災意識の裾野の広がりを図る。

●受講対象／地域住民



タイムスケジュール

10:00	開始　10:00〜15:00
	以下は常時参加者受付
	●「体験ランド」 メニュー① ▶P13
	・目隠し避難体験
	・津波実験装置
	●グッズランド
	・家具転倒防止コーナー
	・防災知識&防災グッズの実物展示
11:00	講習15分
	●幼児向け防災教育用カードゲーム「ぼうさいダック」 メニュー⑩ ▶P25
11:15	公演15分
	●ご当地キャラクターによる防災ショー(演劇)
11:30	実演30分
	防災食バー　実演&試食
12:30	実演30分
	防災食バー　実演&試食
13:30	講習15分
	●ぼうさいダック
13:45	公演15分
	●ご当地キャラクターによる防災ショー(演劇)
14:00	実演30分
	防災食バー　実演&試食
14:30	講習15分
	●ぼうさいダック
15:00	終了

＊防災食バーの実演では、調理の準備など、各実演の前に30分ほど準備時間を設けましょう。

モデル講座参加者の声

●防災食をはじめて食べました。缶詰レシピはふだんでも活躍しそうです。

●家族と防災について話す良いきっかけになりました。

★ 内容例（道が実施したモデル講座から）

体験ランド〜楽しみながら防災を学ぶ体験コーナー

体験を通して、楽しみながら防災を学ぶために、目隠し避難体験コーナーや津波実験装置を設けました。避難体験コーナーでは、夜間の停電を想定して、災害発生時に何分で避難準備ができるかを体験しました。



グッズランド〜家具転倒防止コーナー 防災知識&防災グッズの実物展示

家具の固定方法などのアドバイスを行うコーナーを設けました。また、防災知識が学べるパネル展や売り場と連動した防災グッズの実物展示も行いました。



ゲームランド〜ご当地キャラと『ぼうさいダック』

幼児・児童を対象に、防災に大切な動作が身に付く体を使った幼児向け防災教育用カードゲーム『ぼうさいダック』を行いました。
また、防災に関心のない子どもでも楽しみながら身に付けられるように、ご当地キャラクターによる「防災ショー」も開催。カードゲームやショーを通して、子どもたちは日ごろから備えをしておくことの大切さを学びました。





食ランド〜おいしい防災食レシピ&防災食バー

家庭でできる〝美味しい&簡単非常食レシピ〟を実演し、実際に試食も行いました。アルファ米・パンの缶詰など、いざというときのために備えておきたい防災食の試食も行いました。



ワンポイントアドバイス

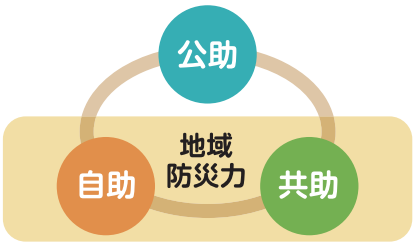
●気軽に参加していただくためには、ご当地キャラクターの活用や防災食の試食など、楽しみながら参加できるメニューを盛り込むことが効果的です。

Ⅲ 防災教育の輪をひろげるために

地域防災力を高めるためには、地域の一人ひとりが防災意識を持ち、災害に対応する力を身につけていく必要があります。また、防災活動を活発に進めるために、家庭、学校、企業、行政など地域を構成する各主体が相互に連携して、防災教育の輪を地域全体にひろげていくことが重要です。

1 自主防災組織の立ち上げ

Q 自主防災組織とは?



自主防災組織とは、「自分たちのまちは自分たちで守る」という心構えで、地域の人々が自発的に防災活動を行う組織です。

東日本大震災などの過去の大規模災害では、消防など公的機関に助けられた人よりも、家族や近隣住民による救助が多くみられました。災害から身を守るためには、地域ぐるみの協力体制による「共助」が必要で、それを生かすために「自主防災組織」の存在は不可欠です。

●「家族・隣近所の安全・安心は自主防災組織から」(北海道)
https://www.pref.hokkaido.lg.jp/sm/tkt/bsb/jisyubousai.html
●「自主防災組織の手引き」(消防庁)
https://www.fdma.go.jp/mission/bousai/ikusei/items/bousai_2904.pdf

Q どんな活動をするの?

自主防災組織は平常時には災害に備えた訓練などの活動を行い、災害時には避難誘導や給食・給水活動などのさまざまな共助活動を行います。日ごろからみんなで連携し合いながら防災活動に取り組むために、通常の町内会・自治会活動などに防災に関連した要素を盛り込み、防災意識を高めることが有効です。

平常時自主防災組織の取り組み事例

●お祭りで炊き出しをするなど、防災の取り組みを地域のイベントに盛り込む。

●町内会などで、地域内を実際に歩き、防災拠点や危険箇所をみんなで確認する。

●町内会の運動会などの行事で、バケツリレーなど、防災に関連した取り組みを盛り込む。

●地域の小学校や中学校と協力し、休日などに「防災フェア」を行う。

Q 自主防災組織を結成・運営するには?

自主防災組織を結成するためには…
大きく2つの方法があり、既存の組織を活用する方が簡単に結成できます。

■既存の組織を活用
町内会や自治会などの規約に、「防災に関する事業」などを追加することで、組織の中に防災部などを設けて結成

■新たに結成する
既存の組織に関係なく、新たにメンバーを集めて結成

組織結成の具体的な流れ

まずは話し合いを
組織の結成について、町内会や自治会に提案しましょう
↓
案をまとめましょう
組織の基本的な事項について、案を検討しましょう
↓
結成に同意を得ましょう
町内会や自治会の総会で討議し、同意を得ましょう

自主防災組織を運営するためには…
効率的な運営のためには、基本的事項を明確にすることが有効です。

自主防災組織の規約を作成(運営のルールづくり)
組織の目的・事業内容、役員の選任および任務、会議の開催、防災計画などの基本的な事項

防災計画の作成
日常や災害時における行動の取り決め

見直し ⇐ ⇒ 反映

活動目標・年間活動計画
中長期的な活動目標の設定、継続的な活動による目標設定

●活動目標を定期的に見直しながら、活動計画を実施する。
●実際の活動状況をもとに、防災計画を見直し、活動目標や活動計画へ反映する。

■自主防災組織への女性の参画が重要 災害発生時、被災地の救助や救急活動において重要な役割を担う自主防災組織においても、女性も主体的に役割を担い、積極的に活動することが求められますが、現状では、女性リーダーの育成の必要性が十分認知されているとはいえません。また、女性消防団、婦人防火クラブ、婦人会などの役割も重要ですので、地域の自主防災組織の体制や活動における女性の参画を進めて行くことが重要です。

組織の結成や運営などの詳細については、お住まいの市町村にご相談ください。

● 札幌市　ひまわり連合自治会防災会

★冬季防災訓練

ひまわり連合自治会防災会は、平成9年(1997年)に6つの町内会によって設立され、地域の防災訓練や救命講習に積極的に取り組んでいます。
年2回（秋季・冬季）の防災訓練を、平成12年(2000年)から継続して行っており、共助による住民の結束を図っています。
訓練内容は、救命講習や地域での避難支援対策に関する講演と停電下を想定した避難訓練、非常食の試食や炊き出しなどで、訓練後は災害時に非常食となるアルファ米や豚汁を食べながら交流を深めています。



● 函館市　高丘町会自主防災会

★地域の福祉施設や学校などと作る地域防災ネットワーク

高丘町では、町会が主体となって平成22年(2010年)4月、地域にある幼稚園から大学、高齢者福祉施設、コンビニエンスストアなど14の団体・機関で構成する「高丘町地域防災ネットワーク協議会」を発足させています。地域が一体となって緊急連絡先などの情報共有や防災マップ上での避難路の確認、地域防災のあり方について検討を進めています。災害時要援護者支援モデル地区にも指定され、支援を必要とする方（73名）の情報共有や支援体制（162名）の構築に向けて取り組んでいます。（平成26年3月現在）



● 稚内市　こまどり町内会

北海道町内会連合会　http://www.d-choren.or.jp/ep02.html

★工夫を凝らした防災避難訓練（避難済みの目印に黄色いハンカチ）

大地震発生による大津波警報発令を想定した防災訓練を行いました。参加者は、各家庭から非常持出品を持ち、火の元や戸締まりの確認後、避難済みかどうかが視覚的に一目でわかるように、目印として黄色いハンカチを玄関先に掲げ、指定場所に避難しました。
また、前もってアンケートで高齢者や障がいのある方を調査し、リヤカーや車椅子を活用することで要配慮者も避難訓練に参加しています。



● 兵庫県　加古川グリーンシティ防災会

加古川グリーンシティ防災会　http://www.greencity.sakura.ne.jp/greencity_bousaikai/

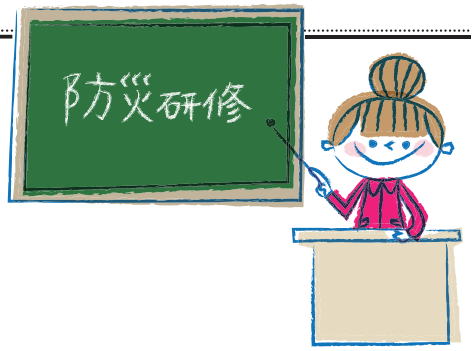
★「楽しく防災活動をやろう」をテーマにした生活防災の取り組み

約600世帯が暮らす大規模マンション群の住民で結成する自主防災組織で、楽しく防災の輪をひろげることを念頭に、日常の暮らしの中であいさつやイベント、お祭りを通じて、住民の交流を図りつつ活動を展開しています。防災情報をひとりでも多くの方に楽しく提供しようと、ブログや防災インターネットラジオ「防災SHOTBAR」を開局、平成26年(2014年)1月からはスマートフォン対応にリニューアルするなど、常に新たなチャレンジを進めています。内閣府をはじめさまざまな賞を受賞した全国的にも先進的な組織で、ホームページの情報も充実しています。



2 地域の防災リーダーの養成と活用

北海道地域防災マスターの活用



Q 北海道地域防災マスターとは?

「北海道地域防災マスター」は、防災経験のある警察や消防、自衛隊、道や市町村など行政職員のOBをはじめ、地域で防災活動に取り組んでいる方々に、その中心となり、平常時の取り組み促進や災害時の声かけなどのキーマンとなっていただくことを目的として、道が認定する制度です。
道が実施する「地域防災マスター認定研修」を受講することにより認定され、 令和3年9月末現在で3,800人を超えるマスターが各地に誕生しています。
活動はボランティアとなりますが、自治体や町内会などと連携しながら、研修の講師や避難訓練のお手伝いなどさまざまな活動をしていただいています。防災マスターに対する活動依頼などは、各(総合)振興局・市町村の防災担当が窓口です。

●道内の地域防災マスターの名簿および活動状況
https://www.pref.hokkaido.lg.jp/sm/ktk/bsb/master/masterlist.html

北海道地域防災マスター地域別人数(令和3年(2021年)9月末)

振興局	人 数	振興局	人 数	振興局	人 数
空 知	425	渡 島	244	オホーツク	282
石 狩	728	檜 山	62	十 勝	393
後 志	81	上 川	226	釧 路	262
胆 振	520	留 萌	70	根 室	159
日 高	156	宗 谷	276	その他	3
合 計	3,887				

Q どんな活動をするの?

平常時の活動

- ●自主防災組織・町内会防災活動などへの参加
- ●災害図上訓練 (DIG)の普及
- ●居住地域近隣の災害時要配慮者の把握など

災害時の活動例

- ●自主防災組織や近隣住民と連携協力して行う初期消火、負傷者などの救出・救助
- ●被災情報、被災者ニーズの市町村への提供など

北海道地域防災マスターの活動事例

●十勝 とかち防災マスターネットワーク

十勝総合振興局地域政策部地域政策課 http://www.tokachi.pref.hokkaido.lg.jp/ts/tss/chisei/bousai-top/bousaimasuta.htm

十勝総合振興局管内では、北海道地域防災マスターによる自主的な活動を推進し、マスター間の情報交換などを行う「とかち防災マスターネットワーク」を平成20年(2008年)7月に設置しました。管内各地で実施される防災研修会やイベントなどに、ボランティアとして関わり、地域の防災の取り組みを支えています。おそろいの赤いジャンパーと帽子を製作し、楽しい雰囲気づくりを心がけながら積極的な活動を展開しています。

活動内容

- ◆帯広市地域防災訓練および冬季防災訓練での防災グッズ展示・説明など
- ◆災害図上訓練(DIG)の進行役、避難所運営ゲーム(HUG)の進行役・読み上げ役
- ◆オビヒロホコテンでの炊き出し実演・防災クイズ
- ◆研修会講師など



●恵庭市 恵庭市地域防災マスター研修会

恵庭市では、市内在住の北海道地域防災マスターに、各地域の防災力の向上に一層関わっていただこうと、平成25年度から市主催の研修会を実施しています。
第1回目の研修会は平成25年(2013年)8月に開催され、気象台職員から恵庭市の災害状況や気象情報の見方などを学ぶとともに、すでに各地域で活躍している札幌市在住の防災マスターを講師に招き、防災マスターの役割や活動について学習しました。これは、地域の防災リーダーとなりうる地域防災マスターを、町内会などと結びつけ活動の場を広げ、市全体の防災力の底上げにつなげる取り組みです。



●洞爺　洞爺湖有珠火山マイスター

洞爺湖有珠火山マイスターネットワーク　http://volcano-meister.jp

★設　立：平成20年(2008年)3月　★構　成：54名(令和3年4月現在)
★主　体：洞爺湖有珠火山マイスター運営委員会
(胆振総合振興局・洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会)

洞爺湖有珠火山マイスター制度とは、有珠山のある西胆振地域が火山と共生する地域のリーダーを育てる「人づくりの仕組み」です。火山マイスターは、有珠火山地域と洞爺湖の地域特性や自然について学び、正しい知識や噴火の記憶・経験、災害を軽減する知恵などを、ジオパークを通じた地域づくりの中で次世代や地域内外の方々に向けて、自らの言葉で語り継いでいく活動を行っています。火山マイスターは、運営委員会などが主催する「養成講座」を受講した後、「洞爺湖有珠火山サポーター」として登録、さらに「認定審査」としてフィールドでの実践的な審査と面接審査を経て認定されます。



活動内容

◆地域の防災活動に対する助言・協力や防災講演会などの講師
◆地元で開催される登山学習会や子ども向け火山学習会などの講師やサポート
◆有珠火山防災会議協議会と連携した、立ち入り規制区域内での防災教育

●札幌市　札幌市 DIG マスター

★制度開始：平成21年(2009年)度　★登録者数：49名(令和3年4月現在)
★主　体：札幌市危機管理対策室

札幌市では、地域の防災リーダーや市内在住の北海道地域防災マスターなどを対象に、災害図上訓練(DIG)の進行役を務める「DIGマスター」を認定しています。DIGマスターは、参加者同士がコミュニケーションを図り、楽しみながら自分たちの住んでいる地域を知ることができるDIGを普及させることを目的に、地域(町内会、連合町内会など)でDIGの実施支援を行っています。



活動内容

◆町内会ほか、希望する団体・個人グループへ災害図上訓練(DIG)を実施

●千歳市　千歳市防災マスターリーダー会

★設　立：平成23年(2011年)6月
★構　成：22名(令和3年8月現在)　★主　体：市民有志

千歳市で発生した過去の災害や今後の地震想定を踏まえ、市民の防災意識の高揚や自主防災組織の結成促進を図り、市民協働で災害に強い千歳市をめざすことを目的に設立しました。「市民が災害に備える」ために手助けをしていきたいという気持ちをもった有志が集まって結成されたもので、DIGや防災に関わる講習会などを積極的に実施しています。



活動内容

◆町内会ほか、希望する団体・個人グループへ災害図上訓練(DIG)を実施
◆普通救命講習および一般救急講習指導

●奥尻町　奥尻島津波語りべ隊

檜山振興局　https://www.hiyama.pref.hokkaido.lg.jp/ts/tss/700kataribe.html

★設　立：平成24年(2012年)4月　★構　成：13名(令和3年4月現在)
★主　体：奥尻町

東日本大震災の後、北海道南西沖地震の経験や復旧・復興経験を学びに全国から奥尻島に視察者が訪れたことをきっかけに結成しました。南西沖地震で悲惨な状況に遭遇しながら、行政や民間などの立場から復興に携わった語りべ隊が、島を訪れる方々への説明や、島外での講演会などを通して、南西沖地震の教訓を後世に残すために活動しています。災害発生20年を迎えた平成25(2013)年には、「語りべ隊からのメッセージ」をまとめました。



活動内容

◆奥尻島防災フットパスでの案内
◆地震津波防災や被災経験の継承を目的とした研修会における講演など

3 いろいろな主体による取り組みをひろげる

防災教育を進めるときには、力強い仲間がいます。一緒に始めましょう。

気象台

札幌管区気象台や地方気象台（測候所）のウェブサイトには、地域で防災教育を行うときに活用できる、過去の災害記録や防災に関わるさまざまな情報などが掲載されています。また、道内各地の気象台では、幅広い層を対象に、講演会や防災イベントなどの相談を受けています。

対　象

公共性・公益性のある団体や機関など

◆気象台の防災教育の資料など（札幌管区気象台）
https://www.jma-net.go.jp/sapporo/

〈 道内の気象台 〉

札幌管区気象台	011-611-3217（業務課） https://www.jma-net.go.jp/sapporo/
稚内地方気象台	0162-23-6016 https://www.jma-net.go.jp/wakkanai/
旭川地方気象台	0166-32-7101 https://www.jma-net.go.jp/asahikawa/
網走地方気象台	0152-44-6891 https://www.jma-net.go.jp/abashiri/
釧路地方気象台	0154-31-5145 https://www.jma-net.go.jp/kushiro/
帯広測候所	0155-25-2334 https://www.jma-net.go.jp/obihiro/
室蘭地方気象台	0143-22-2598 https://www.jma-net.go.jp/muroran/
函館地方気象台	0138-46-2211 https://www.jma-net.go.jp/hakodate-c/

北海道開発局

各種「出前講座」の中で、「防災」をテーマとした講演を行うほか、治水や道路などの防災に関わる映像資料の貸し出しも行っています。また、ウェブサイトには防災に関わるパンフレットなどが掲載されています。

出前講座の例

・北海道開発局の防災対策の取り組みについて
・地域防災力向上の取り組みについて
・北海道開発局の災害対策用機械について

◆北海道開発局出前講座リスト
https://www.hkd.mlit.go.jp/ky/ki/kouhou/splaat00000046k7.html

〈 開発局ウェブサイトから入手できる防災資料の例 〉

●水防災教育用資料

河川の正しい理解と水災害の基本的な知識や対処方法の習得を目的とした資料です。学校や職場、地域などで、年齢層に応じ、直ぐに使えるプレゼンテーション資料や、理科の実験にも応用できる「実験素材集」、遊びの要素を取り入れた「水防災カルタ」などが掲載されています。
https://www.hkd.mlit.go.jp/ky/jg/bousai/ud49g70000009cm0.html

●北海道地区 道路情報

通行止め情報、道路沿いの気象データやカメラ画像が入手可能です。
http://info-road.hdb.hkd.mlit.go.jp/

北海道

北海道の防災教育の推進に向けて、普及啓発や必要な情報の収集・発信を行っています。また、地域における防災教育の担い手育成に向けて北海道地域防災マスターの認定・フォローアップ研修、派遣対応を行っているほか、北海道シェイクアウト（P25）などの取り組みを行っています。

北海道地域防災マスター 各（総合）振興局・市町村の防災担当へお問い合わせください	ボランティアとして、地域の防災訓練・防災研修会などで、自主防災組織結成・参加の呼びかけ、災害図上訓練（DIG）の普及などの取り組みを行っています。 https://www.pref.hokkaido.lg.jp/sm/ktk/bsb/masterlist.htm
北海道防災教育アドバイザー制度 北海道総務部危機対策局危機対策課までお問い合わせください	防災に関する様々な分野の専門的な知識を有する方々や被災経験された方を「北海道防災教育アドバイザー」として登録し、市町村や自主防災組織、各種団体等の防災教育の取組ニーズにあわせて紹介する制度です。 http://kyouiku.bousai-Hokkaido.jp/wordpress/bousai-adviser/
ほっかいどう防災教育協働ネットワーク	防災教育を推進する個人・企業及び関係団体、行政機関等の方々が連携・協働する組織で、「道民みんなで取り組む災害に強い北海道」の実現を目指しております。 http://kyouiku.bousai-Hokkaido.jp/wordpress/network/

教育庁では、小中高生向けの防災教育教材や教師用の指導手引「学んDE防災」リーフレットや道内の特色ある防災教育の事例をまとめた「防災教育実践事例」、「1日防災学校」の取組などをウェブサイトにて公開しています。

学んDE防災	小中高生の各対象別に、地震編・津波編・風水害編の防災教材と指導手引を公開しています。 https://www.dokyoi.pref.hokkaido.lg.jp/hk/ssa/manan_de_bosai.htm
防災教育実践事例集	防災教育の事例を管内別、教育課程別、学校種別などカテゴリ別に公開しています。 https://www.dokyoi.pref.hokkaido.lg.jp/hk/ssa/bosai_jirei.htm
1日防災学校	学校の授業等で、道、市町村、学校、消防・自衛隊等防災関係機関と連携し、実践的な体験活動を取り入れた1日防災学校に取り組んでいます。 http://www.dokyoi.pref.Hokkaido.lg.jp/hk/ssa/bosai_jirei.html

防災教育をサポートする機関・団体

行政	**道内各市町村** ●各市町村へお問い合わせください	地域住民を対象とした出前講座を開催している市町村があり、その中には、防災に関する講座が含まれている場合もあります。 （各自治体のHPを参照ください）
	北海道消防学校 ●江別市中央町 16-1 ●TEL 011-382-4161 ●FAX 011-382-4162	消防職員および消防団員に対する教育のほか、自衛消防隊員や防火管理者などに対し、消防、救急および防災などに関する必要な知識を習得するよう指導、防災意識の普及啓発を行っています。 https://www.pref.hokkaido.lg.jp/sm/sbg/index.htm
	総務省消防庁 ●東京都千代田区霞が関 2-1-2 ●TEL 03-5253-5111	市町村の災害対応能力の向上や防災リーダー育成に向けた支援、消防団確保などアドバイザーの派遣などを行っています。 https://www.fdma.go.jp/
大学・研究機関	**北海道大学大学院理学研究院附属地震火山研究観測センター** ●札幌市北区北 10 条西 8 丁目 ●TEL 011-706-3591（地域防災情報支援室）	地震火山に関する普及啓発活動の一環として、出前講座・部外研修・講演会・公開講座などの講師派遣依頼を受け付けています。また、地震火山地域防災情報支援室において、地域貢献をめざした普及啓発活動にも積極的に取り組んでいます。 https://www2.sci.hokudai.ac.jp/faculty/isv/
	北海道教育大学 ●札幌市北区あいの里 5 条 3-1-3 ●TEL 011-778-0210（総務部総務課）	各専攻を越えた全学連携科目として設置している「現代を読み解く科目群」の一授業として「子ども・地域と防災（犯）教育授業」を開講し、各キャンパスの所在地域において「災害図上訓練（DIG）」を取り入れた参加体験型ワークショップを実施しています。 https://www.hokkyodai.ac.jp/
	日本赤十字北海道看護大学看護開発センター ●北見市曙町 664-1 ●TEL 0157-66-3311	地域貢献の一環として、学外からの依頼に応じ、オホーツク総合振興局管内を対象に教員が各地域に出向いて講義を行う「出前講義」を実施しています。 https://www.rchokkaido-cn.ac.jp/nursing_develop/demaekougi.html
	国立研究開発法人防災科学技術研究所 ●茨城県つくば市天王台 3-1 ●TEL 029-851-1611	国民の防災意識の向上を図るため、市町村向けの防災に関する各種コンテンツをHP上で提供するほか、行政機関や教育機関、民間、学協会などに対する講師派遣を行っています。 http://www.bosai.go.jp/study/inspect/lecture_request.html
財団・社団	**(公財)札幌市防災協会** ●札幌市白石区南郷通 6 丁目北 2-1 ●TEL 011-861-1211	町内会・会社・学校・各種団体などで開催される研修会や学習会などに、依頼に応じた講師を派遣しています（講師派遣料のほか、開催場所が札幌市以外の場合、交通費などが別途必要）。 http://www.119.or.jp/koushi/index.html
	(一財) 消防科学総合センター ●東京都三鷹市中原 3-14-1 ●TEL 0422-49-1113	市町村防災研修として、各対象に適した災害対応に関する実践的な知識、ノウハウ、スキルの習得の場を提供し、災害対応力の向上を図ることを目的として実施しています。 https://www.isad.or.jp/cgi-bin/hp/index.cgi?ac1=IK23&ac2=&Page=hpd_view
	(一社) 日本損害保険協会北海道支部 ●札幌市中央区北 1 条西 7 丁目 1 三井住友海上札幌ビル 7F ●TEL 011-231-3816	「ぼうさいダック」や「ぼうさい探検隊」に取り組む際の各種サポートを行っています。また、道民・道内企業のリスク削減のため、防災・防犯などに関する各種啓発活動に積極的に取り組んでいます。 https://www.sonpo.or.jp/protection/bousai/
	(一社)北海道町内会連合会 ●札幌市中央区北 2 条西 7 丁目 北海道社会福祉総合センター（かでる 2.7） 2F ●TEL 011-271-3178・241-3976	「防災活動研修会支援助成事業」として、町内会連合会正会員組織や所属の地区連合会・単位町内会において実施される防災訓練や自主防災組織研修会などに対して助成を行っています（助成額2万円）。 http://www.d-choren.or.jp/ep02.html
	(一社) 北海道建築士会地域貢献活動センター ●札幌市中央区大通西 5 丁目 11 大五ビル 6F ●TEL 011-251-6076 ●FAX 011-222-0924	「地域貢献活動基金」として、建築士会員が参画して、営利を目的としない地域貢献活動に対して活動費の補助を行っており（限度額20万円）、対象事業に「防災活動や防災施設の整備」が含まれています。 http://h-ab.com/committee/reg-center/
NPO法人	**NPO法人環境防災研究機構北海道（CeMI北海道）** ●札幌市中央区北 1 条西 8 丁目 2-39 日宝大通ビル 8 F ●TEL 0154-42-0033	北海道内の諸地域や住民が受ける自然災害・環境劣化被害の軽減を目標に、環境の保全と減災に関する情報の提供、講演会・シンポジウムの開催による普及啓発などを通じて、関係機関と地域行政・住民との連携を支援しています。 http://www.cemihokkaido.com/
	北海道防災士会（NPO法人日本防災士会北海道支部） ●札幌市北区新琴似 4 条 6 丁目 5-3 ●TEL・FAX 011-762-3779	NPO法人日本防災士会の支部の位置づけで、災害体験講演や防災訓練の指導のほか、災害時支援活動・地域の町内会や学校・事業所に対する防災普及活動の取り組みを行っています。 http://bousaisikai.blog.fc2.com/blog-category-1.html E-mail ahk87864@soleil.ocn.ne.jp

※ここに掲載した機関・団体は一例です。このほかにも、さまざまな機関・団体が防災教育をサポートしてます。

学べる施設

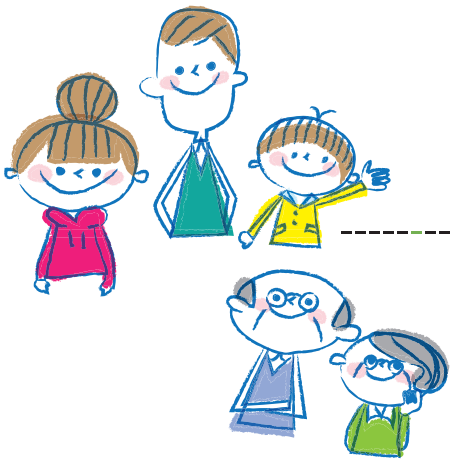
総合・防災センター	**札幌市民防災センター** ●札幌市白石区南郷通６丁目北 ●TEL 011-861-1211	地震体験コーナーや消火体験コーナーなどを備えた施設です。各種災害の模擬体験を通じて、防火・防災に関する知識や災害時の行動を学ぶことができます。 https://www.city.sapporo.jp/shobo/tenji/gaiyou/
	釧路市民防災センター ●釧路市南浜町 4-8 ●TEL 0154-23-0425	各種災害時に適切な行動がとれるよう、ふだんからの対応策や「自分のいのちは自分で守る」ための防災知識や防災行動力を4つの体験コーナーで学ぶことができます。 https://www.city.kushiro.lg.jp/bousaikyu/bousai/bousaicenter/0003.html
	緑ヶ岡コミュニティ消防センター ●釧路市緑ヶ岡１丁目 21-1 ●TEL 0154-23-0430	地域住民の防災に関する知識や技術を向上させ、防災意識を高めるための施設で、ロビーには避難器具などの防災機材が展示してあります。 https://www.city.kushiro.lg.jp/bousaikyu/bousai/bousaicenter/0001.html
	千歳市防災学習交流施設「そなえーる」「学びの広場」「防災の森」 ●千歳市北信濃631-11 ●TEL 0123-26-9991	「学ぶ・体験する・備える」をキーワードに、災害の疑似体験から防災知識を身に付けられます。『防災の森』では災害時を想定した野営生活や訓練も行うことができます。 http://www.city.chitose.lg.jp/docs/98-51891-192-1016.html
	伊達市防災センター ●伊達市松ヶ枝町 13-11 ●TEL 0142-23-9119	有珠山の特徴を解説したパネルや防災用品が展示されているほか、消火体験、暗闇体験、地震体験など、災害が起こったときと同様の体験ができ、楽しく学ぶことができます。 https://www.city.date.hokkaido.jp/hotnews/detail/00000494.html
	北広島市防災センター ●北広島市共栄 586 ●TEL 011-376-7157	防災・避難用品や、千歳川の過去の洪水、整備計画などのパネルを展示しています。また、防災に関する知識の普及・啓発の拠点として、各種の事業を行っています。 https://www.city.kitahiroshima.hokkaido.jp/hotnews/detail/00007850.html
津波	**奥尻島津波館** ●奥尻町字青苗 36 ●TEL 01397-3-1811	北海道南西沖地震の災害記憶を忘れないため、またそこから学んだ教訓を後世に残すため、7つの展示スペースを設け、災害の様子と復興までを伝えています。 https://www.town.okushiri.lg.jp/hotnews/detail/00003668.html
火山	**十勝岳火山砂防情報センター「ヴォルガ」** ●美瑛町字白金 ●TEL 0166-94-3301	十勝岳や火山の恐ろしさを迫力ある立体映像と振動する椅子で観ることができます。火山の記録や砂防事業などをパネルや立体模型で学ぶこともできます。 https://town.biei.hokkaido.jp/emergency/facility.html
	洞爺湖有珠山ジオパーク ●伊達市・豊浦町・壮瞥町・洞爺湖町全域 洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会 ●TEL 0142-74-3015	伊達市・豊浦町・壮瞥町・洞爺湖町に広がる、火山活動によって生まれる「変動する大地」と、火山の恵みを体感できる地域。平成12年(2000年)の有珠山噴火でできた火口や災害遺構を巡る散策路や展示学習施設があり、各種ガイド団体が活動しています。各施設・ガイド団体についてはＨＰにて紹介しています。 https://www.toya-usu-geopark.org/
河川	**江別河川防災ステーション** ●江別市大川通６ ●TEL 011-381-9177	防災・避難用品の展示や川の学習コーナー設置による防災意識の啓発や高揚、水防訓練・生涯学習など、体験学習の場として活用することができます。 https://www.city.ebetsu.hokkaido.jp/soshiki/chisui/337.html
	士別河川防災ステーション「川の遊学館めぐみ」 ●士別市東山町 3345-2 ●TEL 0165-23-4400	天塩川流域の全容を見ることのできる大型ジオラマや水防工法の模型が展示されているほか、炊き出し室、作業室など地域のコミュニティスペースとしても利用することができます。 http://www.city.shibetsu.lg.jp/www/contents/1146556839109/
	滝川地区地域防災施設（川の科学館） ●滝川市西滝川１ ●TEL 0125-24-0989	自然再生ジオラマやパネル、模型、クイズボックスで川について広く学べる施設です。石狩川の災害の科学と治水の歴史を、映像やパネルで紹介しています。 https://www.hkd.mlit.go.jp/ky/kn/kawa_kei/ud49g7000000un0r.html
	石狩地区地域防災施設（川の博物館） ●石狩市新港南１丁目 28-24 ●TEL 011-581-3207	石狩川の治水事業に関係したパネルが展示されているほか、水害による災害図上訓練（DIG）、石狩川放水路の施設説明会、災害セミナーなどが行われています。 https://www.hkd.mlit.go.jp/sp/sapporo_kasen/kluhh4000000au6s.html
	十勝川下流防災施設（十勝川資料館） ●池田町大通南１丁目 ●TEL 015-572-2661	大雨や大洪水になる様子を再現できる「十勝川体験パノラマ模型」、ダムや治水工法の模型、写真やパネルの展示などを通じ、十勝川の歴史や治水を知ることができます。 https://www.hkd.mlit.go.jp/ob/ikeda_kasen/ctll1r0000003oet.html

Ⅳ さまざまな防災教育の実践事例

防災教育の取り組みは、全道各地でいろいろな担い手により、いろいろな場面で、いろいろな形で進められています。その中には、積雪寒冷な北海道の特性に対応したものや、地域の実情などを踏まえたもの、新しい手法で工夫を凝らしたものなども生まれています。また、将来の担い手となる子どもたちへのアプローチはとても大切です。

ここでは、各地で開催されている実践事例をいくつか紹介しますので、みなさんの企画にお役立てください。今後も、こうした取り組みを参考としながら新しい防災活動の芽が生まれ、輪がひろがっていくことを期待します。

分類	事例
1 幼少期の子どもを対象とした実践事例	1. 幼年消防クラブの活動 2. 幼児センターでの地震訓練 3. 保育園での避難訓練 4. 幼稚園での「1日防災学校」
2 児童・生徒を対象とした実践事例	1. 体験型出前授業「教えて！ファイヤーマン」 2. 小学生防火教室 3. 修学旅行での奥尻島訪問 4. 予告無しの避難訓練 5. 学校と地域の連携による防災学習会 6. 1日防災学校 7. 防災キャンプ 8. 教員向けの防災教育研修会
3 多様な形で進む防災教育の実践事例	1. コンサートホールでの防災訓練 2. 高校生防災サミット 3. 漁業者による津波勉強会 4. ラジオ番組と活字メディアで防災教育 5. 避難所での感染症対策検証 6. 厳冬期避難所訓練 7. 地域連携を促す防災教育 8. 防災紙芝居 9. ジオ・フェスティバル 10. サイエンス・カフェ



1 幼少期の子どもを対象とした実践事例



・柔軟な対応力と想像力をもつ幼少期に、危険に対する予知能力や自らを守る行動力を身に付けることは、危機対応力を根幹から高めていく上で大きな意味があります。また、将来に向けた社会の担い手づくりにつながり、地域の防災力を高めることにもなります。
・家庭や子育て中の父母のサークルなどで、子どものいのちを守るための話し合いをしたり、幼稚園や保育園で消防団などと連携しながら災害に備えた訓練を行うなど全道各地で活動が進められていくことが重要です。
・また、子どもたちが防災に興味を示し理解を深めるための紙芝居や絵本、ゲームなどのツールづくりも必要です。

1 幼年消防クラブの活動

●ねらい／幼児期からの防火・防災意識の向上
●対象／幼稚園児、保育園児



・幼年消防クラブは、昭和60年に結成され、現在、札幌市内には46幼年消防クラブがあり、幼少期から避難訓練・消火訓練などを体験し、火災に対する正しい知識を身につけています。
・クラブ員の証である『火の用心の法被』を着て、「防火みこし」や「防火餅つき」・「防火豆まき」など、様々なイベントを開催し、防火の呼びかけを行っています。

2 幼児センターでの地震訓練

●ねらい／幼児期からの防火・防災意識の向上 避難行動を身につける
●主催／大雪消防組合 愛別消防署
●対象／幼稚園児、保育園児



・愛別町内の幼児センターでは令和3年9月18日に、「地震に伴い火災が発生したとの想定」で避難訓練が行われました。
・先ず、園児や幼児センター職員が「地震から身を守る方法」(テーブルの下に入り動かない)の基本行動を体験。非常ベルが吹鳴し「給食室から火災が発生」で避難訓練を開始し、園児はハンカチや手で「くち」を抑えて大ホールへ、全員が無事に避難しました。
・大ホールでは、防火衣を着装し、ゴワゴワした感触にも「消防士の気分」で記念撮影に収まっていました。
・最後に、大雪消防組合愛別消防署員から地震の時は、「身体を低く・頭を守り・動かない」の行動で「じぶんの体は自分で守る」とのお話に、園児は元気に「ハーイ」と返事をして訓練は終了しました。

3 保育園での避難訓練

●ねらい／幼児期からの防火・防災意識の向上 避難行動を身につける
●主催／広尾消防署
●対象／幼稚園児、保育園児



・広尾消防署では、令和3年5月12日(水)、火災予防啓発の一環として町内の保育園で避難訓練及び防火DVDを上映し認定こども園ひろお保育園で、園児など152人が参加しました。
・始めに「1階・ボイラーから火災が発生」したとの想定で避難訓練が行われ、けたたましく非常警報器のベルが鳴り響く中、ベルの音に驚き泣いている園児もいましたが、職員の励ましを受けて全員無事にグラウンドへ避難を完了しました。
署員から「ちゃんと先生の言うことを聞いて落ち着いて避難してください。」との問い掛けに「元気に、ハーイ」と返事をしました。その後、視聴覚室で防火DVDを鑑賞し、「煙の怖さを覚えておくこと」や「ライターやマッチで火遊びは絶対にしません」と園児は署員へ約束、火災予防と防火意識の高揚が図られました。

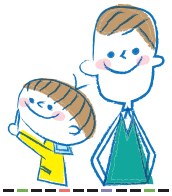
4 幼稚園での「1日防災学校」

●ねらい／子どもたちが実際に体を動かし、声を出して遊びながら、安全・安心への「第一歩」を自然と身に付けさせる。
●主催／北海道教育委員会・北海道総務部危機対策局危機対策課
●対象／幼稚園



・北海道教育委員会では、道、市町村などと連携し、実践的な体験活動を取り入れた「1日防災学校」を幼稚園で試行実施しました。
・幼稚園では、防災教育用カードゲーム「ぼうさいダック」を活用し、地震や津波等災害のイラストが描かれたカードに応じて、頭を守るなど、素早くポーズをとり、災害から身を守る対応行動を学びました。
・園児からは、「地震が起きたときは、頭を守ることをおぼえました。」　先生からは「カードを活用することで、園児が、災害時の行動を楽しみながら覚えることができた。」といった声が聞かれました。

2 児童・生徒を対象とした実践事例



・子どもたちが「生きる力」や「いのちの大切さ」を育むことはきわめて重要であり、将来の防災リーダーづくりにも不可欠です。
・小学生（低学年・高学年）、中学生、高校生のそれぞれがその成長過程に合わせて災害の知識を習得するとともに、地域における自分の役割を学び平常時・災害時にその役割を実践することが大切です。
・学校での授業や地域と連携した合同避難訓練など、大人と子どもが、それぞれの役割を果たしながら進める取り組みが広がっています。
・また、子どもや教員向けのテキストやツールの研究・開発も積極的に行われています。

1 体験型出前授業「教えて! ファイヤーマン」

●ねらい／少年期における防火・防災意識を醸成する
●主催／札幌市消防局
●対象／札幌市内の小学4年生



・体験型出前授業「教えて!ファイヤーマン」は、消防職員が小学校へ出向き、4年生の社会科の学習において、通報、避難、初期消火などの体験型の授業を行うもので、市内約200の小学校で実施されています。
・災害発生時の基礎的な行動を学ぶことで、少年期における防火、防災力の基礎のほか、主体的に行動する力を培うものです。
・また、災害の備えや災害時の家族の集合場所などについて家庭で考える必要性を意識づけ、家族との信頼関係の構築を目的としています。

札幌市消防局
https://www.city.sapporo.jp/shobo/yobo/younenbfc.html

2 小学生防火教室

●ねらい／少年期における防火・防災意識を醸成する
●主催／北広島市消防団
●実施日／令和2年（2020年）11月4日



・北広島市消防団では、令和2年11月4日、北広島市立西部小学校3年生35名に「防火教室」を実施しました。
・教室では、「消防団」についての説明や、車両・資機材の説明がされ、普段見る事のできない様々な装備に生徒達は興味津々な様子で、背負式消火水嚢（ジェットシューター）の体験や放水訓練展示では、放水の迫力に歓声があがりました。
・生徒達が消防団の活動体験等をすることで、少年期からの防災意識の向上が期待できます。

3 修学旅行での奥尻島訪問

●ねらい／被災地への修学旅行を通じて防災を学ぶ
●主催／函館ラ・サール高等学校（受入：奥尻島観光協会）
●実施日・場所
令和2年（2020年）10月10日奥尻島



・奥尻島を直撃した北海道南西沖地震、そして大津波から学び、「地震・津波防災ロールプレイ方式訓練」を体験することにより、より現実的な知恵を身に付けることを目的としています。
・実施当日は、「避難訓練」と「救護訓練」のどちらかに関わるよう生徒を無作為に振り分け、地震発生のサイレンを開始の合図として、それらを同時進行で行う。決められた生徒が、災害対策本部を設置し、参加者全員の所在を明らかにしていく訓練です。
・奥尻島観光協会では、こうした教育プログラムを提案し、町をあげて受入を行っております。

奥尻島観光協会
http://unimaru.com/

4 予告無しの避難訓練

●ねらい／生徒に予告なしの避難訓練を実施し、大雨などの災害に対応することができる危険対応能力を高める。
●主催／道立高等学校
●対象／高校生及び教員



・不測の事態でも迅速かつ適切に対応できる能力を高めるため、予告なしの大雨災害を想定した避難訓練を実施しました。
・体育館に避難した後に、消防職員による講演を通して、大雨など様々な災害の発生原因や、それぞれの災害に応じた適切な避難行動について学習しました。
・また、教員及び生徒が避難器具の適切な使い方を消防職員から学び、救助袋を使った避難訓練を実施しました。

5 学校と地域の連携による防災学習会

●**ねらい**／被災地見学をとおして、地域住民からの災害体験について学ぶ取組や学校、保護者、関係機関が連携した防災教育により、地域防災力の向上を図る。
●**主催**／小・中学校
●**対象**／小・中学生、保護者
地域住民など



・中学校では、東日本大震災の被災地を訪問し、地域の語り部から、津波体験をもとにした防災・減災について学ぶとともに、学んだことを地域住民等に発信し、地域と一体となった取組を行いました。
・小学校では、防災関係機関を講師に招き、ＰＴＡを対象に避難所生活を考える講話や避難所生活を想定した、段ボールベッドの組立体験を行い、学校、保護者、地域、防災関係機関が連携し、地域防災力の向上を図りました。

6 １日防災学校

●**ねらい**／避難所生活等の体験活動を取り入れた指導により、子どもたちの防災意識の向上を図る。
●**主催**／北海道教育委員会、北海道総務部危機対策局危機対策課
●**対象**／幼稚園、小中学校、高校及び特別支援学校



・北海道教育委員会では、平成30年度から、道、市町村、学校、消防・自衛隊等防災関係機関と連携し、実践的な体験活動を取り入れた「1日防災学校」に取り組んでいます。
・「1日防災学校」では、学校の授業等で、防災かるたを使った自分の身を守る方法に関する学習や災害時の避難所で使用する段ボールベッドの組み立て、非常食調理の体験活動などを行っています。
・この他、関係機関等と連携し、煙体験、津波実験、避難所運営ゲーム、防災クイズ、シェイクアウト訓練、救急救命訓練等、様々なコンテンツを活用しています。

北海道教育委員会
https://www.dokyoi.pref.hokkaido.lg.jp/hk/ssa/bosai_jirei.html

7 防災キャンプ

●**ねらい**／体験プログラムを通して防災意識や災害時に対応する力を高める。
●**主催**／各道立青少年体験活動支援施設ネイパル
●**対象**／小中学生など



・道内6か所にあるネイパルでは地域の防災関係機関や団体等からの協力を得ながら、防災キャンプを実施しています。
・避難所の疑似体験や救急救命講習や段ボールベッドの組み立てなど、災害発生時に役立つスキルを習得できる体験プログラムを取り入れています。
・施設によっては保護者にも参加してもらい、家族でも防災意識を高めてもらえるようプログラムを工夫しています。

道立青少年体験活動支援施設ネイパル
https://www.dokyoi.pref.hokkaido.lg.jp/soshiki/sizennoie.html

8 教員向け防災教育研修会

●**ねらい**／教職員対象の研修会等を実施し、指導方法や教育手法を開発し、教職員の資質・能力の向上を図る。
●**主催**／北海道教育委員会
●**対象**／小、中学校教職員



・北海道教育委員会では、市町村教育委員会と連携し、実践的な安全教育に取り組むモデル地域を指定し、地域内の学校が連携して防災教育に取り組む事業「北海道実践的安全教育モデル構築事業」を行っています。
・本事業では、教職員を対象にした、児童生徒への防災教育の指導方法や教育手法の開発を目的とした研修等を実施し、大学教授や気象台職員などの専門家による助言を受けながら、教職員の資質向上を図っています。
・また、モデル地域内の学校・家庭・地域が連携した防災訓練や地域住民が参加する授業等を行い、地域内で得られた成果を道内に普及しています。

3 多様な形で進む防災教育の実践事例



・北海道で暮らす幅広い層に防災教育を浸透させていくためには、その担い手や対象、手法をひろげていく必要があります。また、北海道の気候風土を踏まえた視点の防災教育を進めていくことが求められます。
・防災教育を継続的に進めるためには、従来の活動内容や慣習にとらわれない自由な発想や、時代や社会情勢の変化に対応したツールも必要となってきます。
・道内各地で取り組まれている多様な防災教育の事例を紹介します。

1 コンサートホールでの防災訓練

●ねらい／コンサート中に発生した災害に備える
●主催／札幌コンサートホールＫｉｔａｒａ
●対象／コンサート参加の市民
●実施日／令和2年（2020年）1月16日



・札幌コンサートホールKitaraでは、平成22年度から毎年、コンサート中の災害を想定した防災訓練を実施しています。
・令和2年（2020）年は、コンサート本番中に火災が発生した想定で札幌市消防音楽隊の演奏途中で火災報知器のベルが鳴り響き、場内が真っ暗に。
・ハンドライトと旗を持ったスタッフらの誘導で、約160名の市民が速やかに避難を行いました。

2 高校生防災サミット

●ねらい／道内の高校生が、自然災害に対するコロナ禍での防災・減災について、オンラインで話し合い、防災意識の向上と防災ネットワークの構築を図る。
●主催／北海道教育委員会
●対象／高校生
●実施日／令和3年(2021年)10月15日



・道内の高校生を対象に、高校生の防災意識の向上と防災ネットワークの構築を目指して、「北海道高校生防災サミット」を開催しました。
・参加した高校生は、外部講師による講話などを通じて、事前学習に励み、防災意識を高め、当日を迎えました。
・サミット当日は、全道27校87名の高校生が札幌を主会場として各地とオンラインでつながり、地震や津波など自然災害への対応などについて話し合い、絆を深め、コロナ禍での防災・減災に向けて提言を作成しました。
・「私たち若者は、全校の高校生ネットワークを構築するとともに、私たちの取組を地域に広げます。」などの提言をまとめ、全道に発信しました。

3 漁業者による津波勉強会

●ねらい／漁業者の立場で、津波について学び、避難について考える
●主催／落石漁業協同組合
●対象／漁業関係者、地域住民



・昭和35年（1960年）のチリ沖地震や平成23年（2011年）の東日本大震災など、過去に多くの津波が襲来している太平洋沿岸地域では、災害時に漁船と命を守る安全な避難が必要です。
・根室市落石漁協では、平成18年（2006年）から漁民代表からなるワーキンググループを設置し、大学と連携して津波に対する正しい理解促進と、避難に関する検討を重ねています。あわせて、津波防災の講演会や実態調査、婦人部への説明会などを行い、地域をあげて防災意識の啓発に取り組んでいます。
・こうした漁業関係者の津波防災の取り組みは、白糠町や豊頃町へも広がっています。

4 ラジオ番組と活字メディアで防災教育

●ねらい／ラジオと活字メディアによる防災教育。
●主催／三角山放送局（札幌市西区）
●対象／地域住民など



・三角山放送局（札幌市西区）では、地域の防災への取組み、様々な防災情報のお知らせや災害時にラジオで情報収集が恒常化できるよう週1回の防災番組「安全安心わが街わが家」（火曜10:45）を放送。（出演団体：札幌市役所、消防署、札幌市防災協会、北海道など）
・「三角山SDGsトーク」（木曜14:00）では、SDGsの観点からも防災情報を発信、誰一人取り残さない、気候変動、住み続けられるまちづくりを、の視点から地域での防災意識を促進。
・町内会回覧・小学校配布の情報誌「マガジン762」を年4回（1・4・7・10）発行し、防災意識を高めるほか、地域の防災行事に参加を促す記事を掲載している。

三角山放送局ＨＰ
http://www.sankakuyama.co.jp/

5 避難所での感染症対策検証

●ねらい／学校施設を使用して新型コロナウィルス等の感染症対策を講じた避難所を開設し専門家の指導を受けながら運営上の留意点などを確認。
●主催／北海道
●共催／恵庭市
●実施日／令和２年（2020年）6月21日



・北海道版避難所マニュアルの改正を踏まえ、学校施設を使用して新型コロナウイルス等の感染症対策を講じた避難所を開設し、専門家のご指導を受けながら運営上の留意点等を確認・検証を実施しました。
・検証項目は、車両避難の受付、検温スペース、体育館レイアウト、清掃・消毒、避難所トイレなどを実施し、検証結果を感染症対策を踏まえた北海道の防災対策に反映しています。

北海道総務部危機対策局危機対策課
http://www.pref.Hokkaido.lg.jp/sm/ktk/hinan/kennshou1.html

6 厳冬期避難所訓練

●ねらい／停電のため、通常の暖房が使えない環境下での真冬の避難所運営を想定し、検証結果を防災対策に反映。
●主催／北海道・北海道防災会議
●共催／北見市・日本赤十字北海道看護大学
●実施日／令和２年（2020年）1月25日



・令和元年（2020年）１月25日、北海道は「令和元年度（2019年度）北海道防災総合訓練（厳冬期）」を実施しました。
・訓練では、停電のため、通常の暖房が使えない環境下での真冬の避難所運営を想定し、自衛隊や民間企業の方々の協力を頂きながら、市町村や防災関係機関職員の参加のもと様々な資機材を活用した災害応急対策に取り組み、その有効性について検証を実施しました。
・こうした実証を通じて、冬の北海道を想定した防災対策が進められています。

7 地域連携を促す防災教育

●ねらい／様々な立場で災害に備えることを地域で考える。
●主催／NPO法人三角山、八軒まちづくり協議会、三角山放送局
●実施日／平成28年（2016年）12月3日



・平成28年（2016年）年12月3日、NPO法人三角山等は、「地域防災保育フォーラム」を実施し、赤ちゃん、子ども、お年寄り、障害のある方、妊婦の方など、多様な立場の住民がどう手を携えていけばよいか、子育て、保育、福祉に携わっている人をお招きして、多様な方々の命を守る防災について考えました。
・いざという時に住民同士が助け合いながら、いかにして大切な人命や暮らしを守るか、地域のおける防災課題や防災保育などについて、ディスカッションも行われました。

8 防災紙芝居

●ねらい／子どもたちにわかりやすく津波の教訓を伝える
●対象／幼稚園児、小・中学生など



・高校生のときに北海道南西沖地震を経験した三浦浩さんは『子どもたちがたとえ一人でいたとしても避難できるように、さらに大人になったときにも、きちんと避難できるようになってほしい。そして、それをずっと未来につなげていきたい。紙芝居を通してわかりやすく説明することで、津波の教訓を生かして欲しい』という思いから、子ども向けの紙芝居を作成しました。
・奥尻町立青苗小学校で一般公開したところ好評を博し、町内の学校や島外への出張公演などもあり、平成24年度より組織された「語りべ隊」の活動の一つとしても活躍しています。
【各地防災リーダーの活動事例▶P37】

9 ジオ・フェスティバル

●ねらい／実験や展示などを通じ自然災害・防災への興味を高める
●主催／学校・企業・行政機関による実行委員会など
●対象／小中学生・高校生、一般住民
写真提供：道総研エネルギー・環境・地質研究所



・子どもたちが、天文・気象・地質・環境・防災に関連した実験や工作、展示を通じて、自然の不思議やメカニズムを学びながら、環境問題・自然災害・防災に目を向ける場として、札幌市、釧路市、旭川市など全道各地で開催されています。各地の実行委員会では、さまざまな主体による実験ブースやミニ講演、ジオ講座などを展開しており、楽しく地球や自然を学ぶ場として、継続的な実施をめざしています。
（令和2年度はオンライン開催）

10 サイエンス・カフェ

●ねらい／研究者と市民の対話を通して科学についての理解を深める
●主催／学会、大学、気象台など
●対象／一般住民



・サイエンス・カフェとは、「難しい科学を学ぶ」のではなく、専門家と市民がカフェなど誰でも気軽に参加できる場所で、コーヒーでも飲みながら科学のことを語り合うという取り組みです。
・北海道大学や気象台、道立総合研究機構などにより、自然災害や気象のしくみ、防災などをテーマにさまざまな場所で展開されています。

V 次の世代につなげるために

1 いつも防災

生活全体、地域社会全体にしみ込む防災・減災活動を

①ふだんの生活で、②みんなで（コミュニティで）、③繰り返し（毎日、毎週、毎月、毎年）、④一石二鳥、⑤ご当地主義、⑥災害NGOの活用というエッセンスを取り入れ、防災・減災に関する活動を生活全体の中に、地域社会全体の中にしみ込ませていくと、北海道の暮らしに合った「生活防災」を進めることができます。

ふだんからできる「生活防災」の例



1 住まいや職場の整理・整頓

日常的に整理・整頓ができていると快適に過ごせる上、必要な物をスムーズに取り出すことができます。地震発生時にはケガを防ぎ、すばやい避難行動に繋がります。



2 家族の外出先の相互確認

ふだんから家族がどこでどのように過ごしているか確認することで、家庭内のコミュニケーションの機会を増やすことができます。また、災害時に家族がばらばらに過ごしている場合には、効率の良い安否確認に繋がります。



3 職場内・ご近所のあいさつ

あいさつからコミュニケーションが生まれ、ふだんの助け合いや災害時の「共助」につながります。



4 雪かきの助け合い

北海道の積雪地域に欠かせない冬の雪かきも、ご近所の「声かけ」「協力」の機会となり、災害時にはスムーズな安否確認や助け合いにつながります。



5 地域の清掃活動

地域の清掃活動の際に避難経路の確認や地域の中の安全チェックをすると、地域の美化活動と防災活動を一度に行うことができます。



6 地域の祭りやイベントの実施

行事開催時には、機材の不具合、迷子など、予期せぬ出来事が起こります。その時その場にいる人たちと協力して対応する経験を積んでおくことで、災害時に地域住民が臨機応変に対応する力が養われます。また、行事を通して地域社会の連帯感が育まれ、さらなる地域防災力の向上が期待できます。

●防災を自分の生活習慣に取り入れる「生活防災」は、京都大学防災研究所矢守克也教授により提唱された考え方です。
●本章の内容は、「ほっかいどうの防災教育検討委員会（2013年4月～2014年3月）」の定池祐季委員によるモデル講座講義資料を参考に構成しました。

2 災害伝承



長い歴史の中で、私たちは幾多の自然災害を経験し、大きな被害を受けてきました。その教訓は、古い記録や石碑、物語やことわざとして伝承されています。先人たちが私たちの命を守るために残しているこうした「メッセージ」をしっかりと受け止め、そして次の世代にも伝えていくことが重要です。

1 昭和三陸地震の石碑（えりも町）



昭和8年（1933年）に東北を中心に大津波を発生させ、3,000人を超える犠牲者を出した昭和三陸地震では、えりも町でも大きな海鳴りの後、津波が押し寄せ、町民13人が犠牲になり家屋や漁船も多数流出しました。当時の人々は、この被害を後世に語り継ごうと、えりも町のえりも岬地区と庶野地区に、石碑を建立しました。石碑には「地震海鳴り、そら津波」と記されていて、「地震と海鳴りがあったら、すぐに津波に備えろ」との教訓を伝えています。

2 寛保津波の地蔵（八雲町熊石）



寛保元年（1741年）7月19日未明、渡島大島（現松前町）の噴火により発生した大津波は、道南日本海沿岸から佐渡に至る各地に大きな被害をもたらし、松前藩の記録によると1,467人の犠牲者があったとされています。八雲町熊石の無量寺に建立された地蔵尊の背中には3つの穴が開いていますが、これは津波によって犠牲となり海底に沈んだ方々の背中を銛で突いて引き上げたという出来事を後世に伝えるためのものだといわれています。この「寛保津波」を伝える碑は江差町、松前町などにもあるほか、「寛保津波と渡島大島噴火の図」が函館中央図書館に残されています。

3 災害に関するアイヌの伝承

北海道の地名の約8割は、アイヌ語に由来するとされています。過去の地形や自然現象が推測されるものも多く、「イ・シカラ・ペッツ（非常に曲がりくねった川の意味）」が由来の石狩川は、古くから氾濫を繰り返し大規模な洪水を起こしていたことがうかがえます。また、アイヌは文字を持たないので、数多くの物語が親から子へと語り継がれています。その中には、自然とともに生きていく知恵や自然を上手に使う方法などが盛り込まれていることも多く、津波に襲われた様子を含めた内容の伝承もあります。

4 十勝岳の大正噴火

大正15年（1926年）5月24日に発生した十勝岳の噴火では高温の岩屑雪崩が発生し、残雪を解かして泥流となり、25分余りで火口から25km離れた上富良野町まで到達しました。死者・行方不明者は144人におよび、寒冷地で積雪期に起こる噴火災害の典型事例となりました。この噴火災害の後、行政や住民が緊急避難時に使うために、十勝岳の火山噴火ハザードマップが作成、全戸配布され、昭和63年（1988年）の噴火被害の軽減に大きな役割を果たしました。このことは、北海道のみならず日本の活火山のハザードマップ作成の契機になりました。

5 稲むらの火

安政元年（1854年）2月24日、安政南海地震による大津波が広村（現在の和歌山県広川町）を襲った際、村の高台に住む浜口梧陵は、暗闇の中で逃げ遅れていた村人を、収穫したばかりの稲を積み上げた「稲むら」に火を放つことで高台に導きました。この史実をもとに明治の文豪・小泉八雲が書いた物語「A LIVING GOD」は、海が引くのを見て津波の襲来を予測し、何も気づかない村人にこのことを知らせるため稲むらに火をつけ安全な場所に避難させた話として翻訳され、国語教材にも採用されました。現在も内閣府のホームページなどでも紹介され、紙芝居や人形劇などとして広く防災教育に使われているほか、スマトラ島沖大規模地震やインド洋津波被害の際にも、この物語が津波対策の教材として世界から注目を集めました。

6 津波てんでんこ

1986年（明治29年）の明治三陸大津波や1933年（昭和8年）の昭和三陸津波など、岩手県には、度重なる津波被害によって多くの犠牲者を出してきた歴史があります。しかし、明治・昭和の津波の教訓が語り継がれ、防災文化として定着している地域があります。岩手県釜石市では、従来から津波防災教育を推進しており、その基本となっているのが、三陸の言い伝えである「津波てんでんこ」の精神です。津波が来たらいち早く各自てんでんばらばらに高台へ逃げろという古くからの言い伝えです。子どもたちは津波が来たときに一人でも「てんでんこ」に避難できるよう知識を学んでおり、今回の災害でも多くの命が救われました。

参考資料 1 防災教育に役立つサイト集

内閣府防災情報のページ	防災白書、防災に関するデータ、防災教育・啓発資料などが掲載されています。 http://www.bousai.go.jp/
○みんなで防災のページ	市民、学校、企業、町内会、消防団、水防団、自主防災組織、ボランティア、ＮＰＯなどの方々が、防災の取り組みを考える際に役立つ情報やノウハウを提供しています。 http://www.bousai.go.jp/kyoiku/minna/index.html
○一日前プロジェクト	被災した方々や災害対応の経験をもつ方々に「災害の一日前に戻れるとしたら、あなたは何をしますか」とインタビューし、その話の中から身につまされる小さな物語（エピソード）をまとめ紹介しています。 http://www.bousai.go.jp/kyoiku/keigen/ichinitimae/
○政府インターネットテレビ	内閣官房内閣広報室・内閣府大臣官房政府広報室が配信するインターネットテレビ。「51ch防災チャンネル」や「防災」のカテゴリで防災に関する情報が提供されています。 http://nettv.gov-online.go.jp/index.html
総務省消防庁	生活密着情報などが掲載されています。 http://www.fdma.go.jp/
○チャレンジ!防災48	学校や地域において防災教育を行う際に利用できる教材（指導者用テキスト、補助教材、映像・写真など）を提供しています。 http://open.fdma.go.jp/e-college/bosai/index.html
○防災・危機管理 eカレッジ	地域住民をはじめ、消防職員・消防団員、地方公務員などの方々が、インターネット上で防災・危機管理について学ぶことができます。 http://open.fdma.go.jp/e-college/
文部科学省 地震調査研究推進本部	防災教育や地震に関わる教育関係者および一般向けの情報が掲載されています。 http://www.jishin.go.jp/
国土交通省 防災情報提供センター	国土交通省が保有する防災情報を集約して、わかりやすく提供しています。 http://www.mlit.go.jp/saigai/bosaijoho/
気象庁	気象・地震・火山などの自然現象や科学的根拠をわかりやすく解説。地震・津波・台風・火山に関する資料が提供されています。 http://www.jma.go.jp/
国土地理院	防災マップの作成に必要な地図に関する情報が提供されています。 http://www.gsi.go.jp/
防災教育チャレンジプラン	防災教育で使える素材や防災に関わる授業プランなどが掲載されています。 http://www.bosai-study.net/top.html
(一財)消防科学総合センター	地域防災実戦ノウハウ、災害に関する図書・CDが紹介されています。 http://www.isad.or.jp/cgi-bin/hp/index.cgi
○消防防災博物館	インターネット上の仮想博物館。災害や防災のことをわかりやすく紹介するほか、より詳細に調べるための情報が提供されています。 http://www.bousaihaku.com/
国立研究開発法人 防災科学技術研究所	災害の発生メカニズムや、防災に関わる実験映像などが掲載されています。 http://www.bosai.go.jp/
(公団) ひょうご震災記念21世紀研究機構	教訓情報資料集では阪神・淡路大震災の事象、対応、課題などが紹介されています。 http://www.hemri21.jp/
阪神・淡路大震災 人と防災未来センター	阪神・淡路大震災に関するデータベースが利用できるほか、小中高生、学校の先生、防災関係機関などに向けたページが開設されています。 http://www.dri.ne.jp/
静岡県地震防災センター	地震対策を中心にした資料や防災クイズなどが掲載されています。 http://www.pref.shizuoka.jp/bousai/e-quakes/
NHKそなえる防災 (日本放送協会)	防災に役立つ情報やNHKの取り組みが紹介されています。 NHK「そなえる防災」のページ http://www.nhk.or.jp/sonae/ トップページ http://www.nhk.or.jp/
(一社)日本損害保険協会	「ぼうさいダック」や「ぼうさい探検隊」などの防災教育情報が掲載されています。 http://sonpo-bosai.jp
みんなの防災（全労済）	「親子で楽しめる防災クイズ」や防災科学実験の動画、国崎信江先生のショートコラムなどが掲載されています。 http://www.zenrosai.coop/bousai/
NPO法人プラス・アーツ	ファミリーで楽しく防災を学ぶイベント「イザ！カエルキャラバン！」をはじめ、アートに着目しながら災害に役立つ知識や技を学ぶ取り組みが紹介されています。 http://www.plus-arts.net/
(一社)北海道町内会連合会	「あなたのまちで災害図上訓練DIGをやってみよう！」実践編や「防災ハンドブック～大切な家族を守るために」改訂版、「災害図上訓練DIGのすすめ」などの防災活動啓発パンフレットが掲載されています。 http://www.d-choren.or.jp/ep02.html

参考資料２ 防災教育に関する情報発信

1　ポータルサイト「ほっかいどうの防災教育」



北海道内のさまざまな防災教育に関する情報を発信するポータルサイトです。

○ポータルサイト「ほっかいどうの防災教育」
http://kyouiku.bousai-hokkaido.jp

2　ほっかいどうの防災教育 Facebook





「ほっかいどうの防災教育」Facebookです。
北海道内のさまざまな防災教育に関する情報を発信するSNSです。

○ほっかいどうの防災教育Facebook
@Hokkaido.bousaikyouiku

3　YouTube・ほっかいどうの防災教育「Do　Bow　Sai」



新北海道スタイルでの防災教育を目指し、デジタルコンテンツの充実の一環として、YouTubeを活用した動画配信を開始しました。

○ほっかいどうの防災教育　Do　Bow　Sai
https://youtube/-vgxsvUCayI

4　北海道防災ポータル



北海道において発令中の防災情報をお知らせしています。

○北海道防災ポータル
https://www.bousai-Hokkaido.jp/

※QRコードは(株)デンソーウェーブの登録商標です



ほっかいどうの防災教育
“実践編”

企画・編集・発行：北海道
（平成25年度「ほっかいどうの防災教育検討委員会」から助言をいただきながら、作成しました。）

平成26年3月発行
平成29年3月改訂
令和 4 年1月改訂

このテキストの内容に関する著作権は北海道にあります。営業目的に使用することはできません。

このテキストに関するお問い合わせ
北海道総務部危機対策局危機対策課
TEL：011-204-5900　e-mail：somu.bosai22@pref.hokkaido.lg.jp

ほっかいどうの

防災教育

実践編

最新情報はこちら

ほっかいどうの防災教育　検索

URL：http://kyouiku.bousai-hokkaido.jp　https://www.facebook.com/hokkaido.bousaikyouiku